

千葉県勝浦市

興津海浜遺跡調査報告書

ーデビッド・M・ギルフォイル氏蒐集資料ー



2 0 1 0

興津海浜遺跡調査会

千葉県勝浦市

興津海浜遺跡調査報告書

ーデビッド・M・ギルフォイル氏蒐集資料ー

2 0 1 0

興 津 海 浜 遺 跡 調 査 会

例 言

1. 本書はデビッド・M・ギルフォイル氏が、千葉県勝浦市興津浜において1980年代初頭から2005年にかけて蒐集した土器・陶磁器類を主体とする資料を整理調査した報告である。
2. 表紙の写真は、1963年(昭和38)に撮影された、デビッド氏が幼少期を過ごしていた興津浜である。
3. 調査は、「興津海浜遺跡調査会」を組織し、次のメンバーにより実施した。(執筆者順)
菅根幸裕(千葉経済大学)、内川隆志(國學院大學)、小池 聡(株式会社盤古堂)、
富永樹之(神奈川県教育委員会)、惟村忠志(有限会社ティーケイリサーチ)、堀内秀樹(東京大学)、
小宮山友康、原みちる、土本麻子、伊藤俊治(以上、大成エンジニアリング株式会社)
4. 整理作業は、基本的に各執筆者が無償で作業を分担したが、近世陶磁器の実測、図化、掲載遺物のトレース図の作成、観察表の入力、遺物の写真撮影、編集作業を大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部に委託した。委託費用及び印刷費用については、有限会社わらしべが全額負担した。
5. 本書の編集は、執筆者全員が協議し、土本麻子を中心に行った。各項目の執筆者・文責は文末に明記した。
6. 出川直樹氏(工芸研究家)に寄稿文を賜った。
7. 陶器に書かれた文字資料については、赤澤晴彦氏(日本学術振興会特別研究員)にご教示を得た。
8. 本書巻末の英文要旨は、俵寛司氏(東京外国語大学外国語学部共同研究員)にお願いした。
9. デビッド・M・ギルフォイル氏が蒐集した資料については、氏の希望により本報告書発刊の後に勝浦市に寄贈したい。資料は今後、勝浦市において保存活用を図って頂きたい。
10. 整理作業から報告書刊行にいたる過程で、次の方々並びに諸機関から御教示・御協力を賜った。
明記し、深謝いたします。(順不同・敬称略)
西山平夫・伊藤泰士・山田将司・土本匡・早川泉・千葉隆志・松村一徳・安心院浩子・
勝浦市教育委員会・國學院大學考古学資料館・東京大学埋蔵文化財調査室・大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部

凡 例

1. 遺物図版の縮尺は各図版中にスケールを示した。1/3を基本とし、小形の遺物は1/2で掲載した。
2. 遺物図版の線種は、外形線・中心線・区画線は実線、稜線は破線、釉葉などの表面装飾の境界線は一点鎖線で示した。
3. 遺物実測図中のトーンおよび記号は以下の通りである。
：須恵器(断面) ：灰釉(中世)
：青磁釉(中世) ：鉄釉(中世)
▲：高台、見込みなどの釉隙を表す。
└─┐：播鉢体部の播目範囲を表す。
└─┐：敲打痕、擦痕、使用痕、二次的な加工痕を表す。
4. 遺物観察表の法量については1mm単位まで求めた。>は現存値、()は推定値を示す。
5. 近世陶磁器の数量は、ロクロ成形の製品は底部中央などの特定部位でカウントを行い、表記は推定個体数である。

目 次

例言・凡例	i
目次	ii

写真図版編

勝浦興津浜 遺物散布地遠景	1	8. 二彩唐津	3
遺物採取風景	1	9. 唐津	3
遺物散布状況	1	10. 備前	3
1. 縄文土器	2	11. 瓦	3
2. 土師器・須恵器	2	12. 土製品	3
3. 中世陶磁器	2	13. 硯	3
4. 中国磁器	2	14. 印	4
5. ヨーロッパ硬質陶器	2	15. 火打ち石	4
6. ガラス製品	2	16. 軽石	4
7. 唐津・織部	3	17. 文字・転用資料	4

研究報告編

第1章 採取に至る経緯	5
第2章 調査・報告の経緯と経過	7
第3章 散布地の地理的・歴史的環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第4章 先史	14
第1節 土器	14
第5章 古代・中世	15
第1節 古墳～平安時代	15
第2節 中世	15
第6章 近世以降	17
第1節 陶器	17
第2節 磁器	23
第3節 貿易陶磁器	35
第4節 土製品	36
第5節 土器火鉢	38
第6節 瓦	40
第7節 ガラス製ボトル	40
第8節 石製品	41
第7章 調査のまとめ	48
寄稿文「時空集積」への挑戦	50
CONTENTS	51
SUMMARY	53



勝浦興津浜 遺物散布地遠景（2010年5月撮影）



遺物採取風景
（2005年5月撮影、右：ギルフォイル氏）



遺物散布状況（2008年6月撮影）



1. 縄文土器



3. 中世陶磁器



2. 土師器・須恵器 (左：表面、右：裏面)



4. 中国磁器 (左：内・外面、右：外・底面)



5. ヨーロッパ硬質陶器



6. ガラス製品



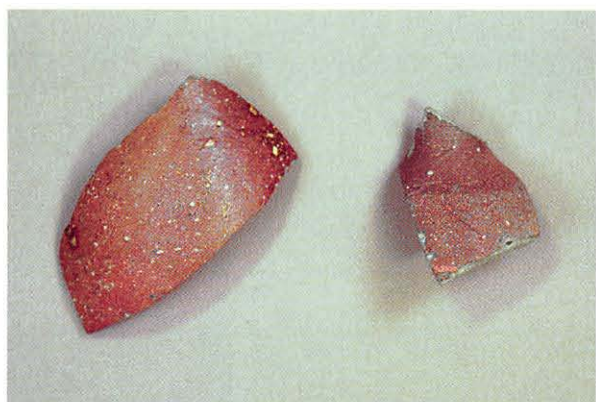
7. 唐津・織部（左：表面、右：裏面）



8. 二彩唐津



9. 唐津



10. 備前



11. 瓦



12. 土製品



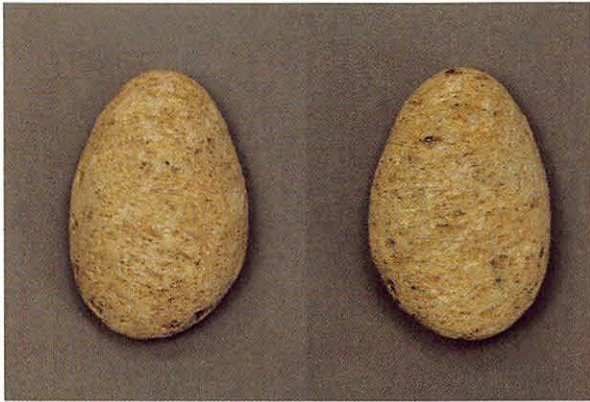
13. 硯



14. 印



15. 火打ち石



16. 軽石



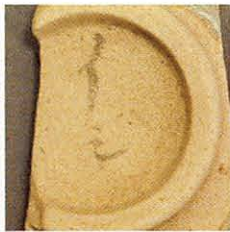
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



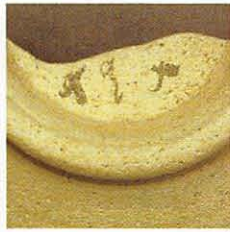
11



12



13



14



15

17. 文字・転用資料

第1章 採取に至る経緯

上総興津は太平洋を望む小さな漁港で、古くから「避難港・風待港」として使われていた歴史がある。

私は40年以上も興津の美しい浜に通い続けている。古陶磁の蒐集を本格的にはじめた1980年代初頭から、子供のころから遊んだこの浜辺に打ち上がる陶片の蒐集を研究の一環として始めたのである。

20数年に亘るこの蒐集で2万点以上の陶磁器・ガラス・玩具・古銭・瓦など、縄文から近世に渡る実に日本の古陶磁の歴史を辿る内容となった。

2005年からこの蒐集の内容を15話にわたり連載し、紹介した（「波打ち際の宝石たち」『小さな蕾』（創樹社））。しかし、考古学の観点、また、房総半島における興津の歴史や避難港・風待港としての位置付けをとおして、陶片を分析する必要性を強く思うようになった。こうしたことから今回の整理調査が実現されることとなった。

毎年4月頃から11月上旬にかけて、ほとんどの週末を興津浜での採取にむけるほどであった。採取の方法については下記の通りである。

- ・興津浜での作業はあくまでも「表面採集」である。
- ・波打ち際を歩きながら打ち上がる陶片を拾うのが基本である。
- ・大潮には波が浜辺の奥に達するため、浜辺全体を見る。
- ・季節・潮の加減により打ち上がる数は異なるものの内容には違いはあまり見られない。時代や産地を別にして、打ち上がるのは土器・陶器・炆器・磁器・ガラスなどである。

また、夏には地元の方が早朝に浜辺を掃除する習慣があり、波打ち際から約2mの幅を熊手などで潮が引いたあとに残されたゴミ・海草などをかき集め浜辺の両脇に掘られた深い穴に埋める習慣があった。ゴミの中には陶片・ガラスなど含まれているため、時にはこの穴の周りで採取することもあった。

2001年に興津港や浜を大きく変えてしまう公共工事が実施された。これは海亀を興津浜に呼び戻すことが目的で、潮の流れを調整すると同時に、砂浜を補強するもので、浜の両脇にある堤防の工事、砂の流出を喰い止めるため港を中心に水面すれすれの堤防をつくり（A地点）、また、興津の沖合から砂を運び浜に流すこととなった。この工事によって打ち上がる陶片の内容に変化はないものの打ち上がる絶対量は激減し、以前の20分の1に減った。

長年にわたる興津浜の観察や、また、興津港やその周辺の歴史背景を元に浜に広がる陶片の出所について考えてみた。

1. 古代から浜や川にゴミを捨てる、また、埋めた物
2. 船から海に捨てた物
3. 陸上の遺跡から流出した物
4. 難破船（興津港内・口）から流出した物

また、興津の歴史的背景から見ると古代から度重なる房総半島への人口移動、近海貿易や陸上の陶磁器流通など、考えられる要素が豊富である。

20年以上に亘る興津浜の陶片との長い旅が今回の報告書で一応の幕を閉じることになるが、大きな課題が二つ残されているように思う。

ひとつには、房総半島から青森にかけて「避難港」「貿易港」として古くから栄えた港が多くあり、こうした港では興津と同様に陶片が残されている可能性が高いと考えられる。こうした陶片の収集・分析からは近海貿易・人口移動・陶磁器の流通などの研究を進める重要な手掛かりとなる。また、「北回り」とは別に、「南回り」説の立証に繋がる手掛かりともなるように思える。

また、海底考古学という視点から興津港を含むこうした「避難港」「風待港」の難破船を研究することは欠かせないものがある。興津



第1図 遺物採集位置

のみならず、房総半島における船の難破の歴史は古く、浜辺に現れる陶片の歴史的背景を理解する重要な手掛かりになることには違いはない。長年に渡る収集の中で地元の人から聞いた興味深い話がある。

1. 浜辺で出会ったおばあさんから昭和の興津港埠頭（海に向かって左側）の工事の時に「大皿がたくさん上がった」（B地点）
2. 海に向かって興津港口右側から中心に突き出ている「虎の背」と言う磯の部分の外側に「船がたくさん沈んでいる」（地元のおじいさんがダイバーから聞いた話）（C地点）
3. 漁師から「むかしは磯に立てられた繫船柱に縄を縛り、難破船から逃れた人を助けたと聞いた」

興津における難破船の歴史を調べる上で本来は聞き取り調査を行うべきだが、これも将来の課題となる。

最後になりましたが、本書の刊行に際して、興津浜での陶磁片収集・分析は出川直樹先生の長年の御指導があって実現したものである。創樹社の伊藤泰士氏には「小さな蕾」誌上において発表の場を提供していただきました。また、今回の資料の分析・整理につきましては、会員の方々に大変お世話になりました。深謝いたします。

平成21年10月31日

第2章 調査・報告の経緯と経過

デビッド・M・ギルフォイル氏（以下、ギルフォイル氏と略す。）が勝浦で採取した陶磁器片が最初に紹介されたのは平成5年（1994）の事である。この年の秋、NHK衛星放送「全国骨董ぶらり旅」の番組中でレポーターである星野知子氏が骨董に纏わる話が5回に渡って放送された。この番組の指南役として出演されたのが工芸研究家の出川直樹氏である。出川氏とギルフォイル氏は番組以前から親しい間柄で、自宅を訪問した際にコレクションと併せて膨大な資料が紹介された。その後、ギルフォイル氏は自宅において独自に整理作業を開始した。

ギルフォイル氏は平成17年（2005）12月号から『小さな蕾』（創樹社）紙上において「波打ち際の宝石たち」と題し採取した遺物の紹介を平成19年2月までの15回にわたり連載した。これを機に本格的な整理作業と報告書の刊行について、惟村と内川が相談を受けた。整理調査をするにあたり何度か話し合いが持たれたが、その時の内容は次のとおりである。

- （1）採取した遺物は、将来的には勝浦市に寄贈し、保管、活用が図られることを希望するが、現状のままで困難であること。
 - （2）採取した遺物は時代や産地が多岐に渡っており、それぞれ専門の研究者が参加し整理作業と執筆が必要であること。
 - （3）遺物の整理、分析は考古遺物と同等に考え、学術的評価を与える必要があること。
 - （4）日頃から古陶磁についてご教示を賜っている出川直樹氏に寄稿文をお願いしたいこと。
- など、ギルフォイル氏の意向も加味しながら報告書を作成する方向で話し合いが持たれた。

平成18年（2006）7月頃から惟村・内川が中心となり整理作業に参加するメンバーを集めることにした。本格的な作業に入る前に興津浜の現地視察を平成19年（2007）4月21日・22日の1泊2日の工程でメンバー5名により行われた。

平成20年（2008）4月12日、スイスのジュネーブに赴任したデビッド・M・ギルフォイル氏が都内に保管した遺物をメンバー7名が実見した。採取された遺物の内容確認および縄文、古代、中世、近世陶磁器について、一部分類作業を行い、また報告書執筆の分担を話しあった。6月27日・27日に1泊2日の工程でメンバー4名が勝浦興津浜の現地踏査を行った。この現地視察で伊藤が中心となり繫留石の鑑定作業などを行った。また大多喜城など関係する史跡などを見学した。7月26日には保管庫での整理作業が困難なことから、東京大学埋蔵文化財調査室の一面を借りて分類・カウント作業を継続した。10月18日には大成エンジニアリング株式会社府中事



分類作業



妙覚寺繫留柱石の調査（平成20年6月）

務所に集合し、6月からの継続作業を行い、報告書の内容等について話し合いを行った。12月19日には國學院大學内川研究室に集合し、各人の分担について進捗状況の報告があった。

平成21年3月28日に國學院大學内川研究室に集合し、①作業の進捗状況の確認。②今後の予定。③編集作業の計画などが話合われた。6月20日(土)には全員の原稿が集まり、大成エンジニアリング株式会社府中事務所において、古代・中世陶器、墨書陶器、瓦、石製品、硝子製品、舶載陶磁器などの写真撮影を行った。その後編集作業を経て、10月に出川直樹氏に寄稿文をお願いし、翌22年3月に俵寛司氏にコンテンツ、サマリー原稿をお願いした。その後、ギルフォイル氏と連絡を取り合いながら、8月28日に印刷のための最終調整を行い、10月に原稿をすべて入稿した。



打合せ会議

(惟村)



分類作業(細分)



写真撮影

第3章 散布地の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

興津の所在する勝浦市は、明治22年(1889)市制町村制の施行によって44ヶ村が合併し、上野村、清海村、勝浦村、豊浜村の五村が成立、その後の変遷合併を経て、上野村、興津町、勝浦町、総野村の4町村となった。昭和30年(1955)4町村が合併し勝浦町となり、さらに昭和33年(1958)の市制施行により今日に到っている。

地理的には、千葉県の南東部、外房に位置し、市内の北西部は房総丘陵に属し、南東部の海岸線はほとんどがリアス式海岸になっているため、砂浜は非常に短いのが特徴である。市域は、ほぼ長方形を呈しており、南縁は太平洋、東縁、西縁、北縁は房総半島南部の上総丘陵と呼ばれる丘陵地である。地形からいうと、勝浦・興津市街地の背後の稜線を境として、北側の高度100mほどの高さで、北流する夷隅川流域と稜線の南側を源流として南流する小河川群の流域に二分される。また、南側の



第2図 興津港の位置

リアス式海岸線に沿って、連続した高い海食崖が発達し、岬を形成する南北方向の尾根が海食崖によって周りを削られている点も地理的特徴として捉えられる。旧興津町の所在する地域は、「南部小河川群地形区」と呼称される太平洋側へ流れる川の流域で、急斜面の丘陵地が大半を占め、太平洋に注ぐ小河川の狭い河口平野に形成されている。南部小河川群地形区の成立は、谷の部分は主に約10,000～6,000年前頃に、海岸部は約6,000年前頃の縄文海進以降に形成されたものと考えられている。房総半島において周りが岬で囲まれ、港の適地と思われる海岸があるのは、岩質の硬い安房層群分布域である勝浦市の勝浦湾、鴨川市の内浦湾地区であり、勝浦、内浦に挟まれて鶴原・守谷・興津の小湾が形成されている。鴨川より西は、地震性海岸段丘地域で、隆起によって大きな湾入のない岩石海岸となっている。八幡岬より東北方向に続く海岸線は、上総層群分布域で岩質が軟らかく侵食されやすいため、平滑な海食崖が続く岩石海岸が太東岬まで続き、その先は九十九里浜、屏風ヶ浦の平滑な海食崖となり、銚子半島と利根川河口に至るまで湾と呼べるような地形はない。このように、房総半島の太平洋側には拠点港である勝浦と内浦間の限られた地域に形成された5ヶ所の湾があり、古くから港として利用されていたのである。

第2節 歴史的環境

勝浦市域には旧石器時代から中世に到る幾多の遺跡、史跡が確認されており、ここでは『勝浦市史 通史編』等に基づいて、興津を含めた地域の歴史的概要を述べることにする。

旧石器時代の遺跡は、夷隅川流域を中心に、市内で6ヶ所確認されており、何れも発掘調査によって層位的に検出されたものではないものの旧石器時代後期に比定されるナイフ形石器、尖頭器といった資料が発見されている。中でも松部字長者台に所在する上長者台遺跡からは、縄文時代住居跡覆土ならびに表面採集資料として合計7点のナイフ形石器が検出されており、小羽戸字野合に所在する野合遺跡では、7点の尖頭器が検出されている。



第3図 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡は、市域において 87 ケ所確認されており、夷隅川とその支流、およびその他小河川流域での台地や丘陵上に濃密に分布する。丘陵部の遺跡は早期から前期、中期にかけての時期が偏在し、海岸部の低地は中期以降の遺跡が多い。該期の複合遺跡である上長者台遺跡では、房総半島南部地域での報告例の少ない縄文時代早期の平坂式土器期の住居跡の他、南西に延びる幅約 40 m の狭小な尾根のくびれ部付近に前期前半に比定される住居址が 28 軒、集石、土壌が検出されている。遺物では前期の決状耳飾の未成品を含む資料が特筆される。守谷字茂浦に所在するこうもり穴海蝕洞では、大正 15 年 (1914) と平成 14・15 年 (2002・2003) に発掘調査が行われ、上層部からは弥生時代後期から古墳時代前期を主体とした遺物が確認され、その下層部からは縄文時代後期の曾谷式、安行 1 式、加曽利 B 2 式といった遺物が検出された。今回報告する資料中にも縄文時代に比定される土器片が含まれており、興津湾西に所在する興津中学校前遺跡からの流入が想定される。

弥生時代には、夷隅川中流域の大多喜町横山遺跡・横山白山台遺跡、いすみ市台遺跡などで該期の拠点集落が確認されている。市域では、夷隅川流域を中心に 15 ケ所の遺跡が知られている。多くは散布地として把握されているもので発掘調査によって確認されているのは、守谷字茂浦のこうもり穴海蝕洞穴群、守谷字浦ノ代の本寿寺洞穴の 2 遺跡のみである。こうもり穴海蝕洞穴は、大正 13 年 (1924) に東京帝国大学人類学教室によって発見され、江上波夫によって小規模な発掘調査が行われ、弥生土器が発見された。昭和 2 年 (1927) にも調査されている。近年では、平成 12 年 (2000)、平成 13・14 年 (2001・2002) に千葉大学考古学研究室によって本格的な調査がなされ、弥生時代中期初頭と後期前半の粉状圧痕を含む土器片が確認された。特筆すべきは、大型のアワビを中心とした貝層中からシカ・イノシシ・サルの肩甲骨、寛骨、肋骨を用いた大量のト骨が発見されている点である。

千葉県における古墳時代の中心地域は房総丘陵北西端に位置する木更津市や富津市周辺で、多くの高塚古墳が造営された。隣接する大多喜町には 1 基の前方後円墳と 11 基の円墳からなる台古墳群が知られているが、勝浦市を含む夷隅地域では古墳時代の包蔵地 38 ケ所が確認されているだけ

で高塚古墳は発見されていない。興津周辺では守谷字長網に所在する長網横穴群、長網B横穴、守谷字小浦に所在する守谷海蝕洞穴群などが所在する。安房地域では、高塚古墳のかわりに海蝕崖面を利用した横穴墓や洞窟を利用した墓が多数認められるのが特徴である。前述したこうもり穴海蝕洞穴からは古墳時代初頭の土師器台付甕が、守谷字蒲ノ台に所在する本寿寺洞穴からは古墳時代前期の土師器・須恵器の他に鉄製刀子や銅釧。卜骨などが発見されている。長網横穴群では、2群10基の横穴からなり7号横穴からは人骨・鉄剣・直刀・鉄鏃・須恵器・土師器などの副葬品が発見されている。興津浜で採集された該期の資料は周辺に所在するこれらの遺跡からもたらされたものであろう。

奈良・平安時代における遺跡は、8ヶ所確認されている。守谷字長網に所在する長網横穴群と長網B横穴は8世紀を中心とする横穴で昭和57年（1982）、59年（1984）に調査され、6世紀末から8世紀末にかけて営まれた家族墓的な様相を示しており2、3、5号横穴から検出された遺物から8世紀に最盛期を迎えたことが確認されている。3号横穴から出土した人骨は熟年男性のもので耳骨に外耳道骨瘤という病理変異が認められることから日常的に潜水漁労活動を生業とした海士であることが推定されている。律令制下における当地の状況は平城京出土の12点の木簡で確認できる。平城宮内裏東方東大溝地区出土の木簡には「安房国長狹郡置津郷戸主丈部黒秦戸口丈部第輪凡鰓陸斤 専当 / 国司目正八位下箭口朝臣大足 / 郡司小領外正八位上丈部（臣力）」□敷 天平□□とあり長狹郡置津郷から鰓6斤を運んでいたことが記されている。長狹郡置津郷は市内守谷・興津・浜行川地域、あるいは、長狹郡であることから鴨川市伊右衛門嶋奥津と考えられ、この地の丈部黒秦の一家に属する丈部第という人物が鰓6斤を運ぶ任務に当たるというもので、国から任命された国司四等官の中でも最下位である目の箭口朝臣大足と地方官である長狹郡の国司四等官の第二位である少領の丈部臣□敷という人物が証明を実施しているのである。長網横穴群出土の外耳道骨瘤の病変を残す男性は、日常的に特産の鰓漁に従事する漁師であった可能性が高い。（□判読不明）

夷隅郡は中世には、伊隅庄と記され12世紀半ば頃に上総氏一族によって鳥羽離宮の金剛心院領として皇室に寄進され、その後伊北庄・伊南庄に分割されたという。石橋山の合戦で敗れ、その形勢を建て直すべく安房国に渡った源頼朝は、上総権介広常、千葉介常胤を従え、破竹の勢いで進撃を開始し、治承4年（1180）10月には鎌倉に入って本拠とし関東の経営に乗り出し、開幕の準備を進めたのである。勝浦近隣の領主であった伊北・伊南氏は、上総権介広常を筆頭とした上総国内の一族2万騎とともに隅田川近辺に集結した頼朝の陣に合流している。頼朝の挙兵を支援し、後に鎌倉幕府の侍所別当となった和田義盛は、伊北庄に在していたと言われるが、その居住地は特定されていない。承久の乱後権力を高めた北条氏は、宮騒動や宝治合戦で勝利し権力を握り、北条方についた御家人たちは西国に領地をもらい受け西遷するものも増えた。上総国伊隅庄ゆかりの伊北氏、深堀氏の一部も13世紀前半から14世紀半ばまで出雲国内で活動していたことが明らかである。鎌倉幕府滅亡後、伊北庄は足利氏の所領となり、南北朝期から室町期には、鎌倉公方・関東管領を中心に各国ごとに置かれていた守護を通じて統治を行っていた鎌倉府の支配下に入っている。

さて、勝浦市域には、創建が中世に遡る寺院が多数知られている。中でも日蓮の生誕地に近いこともあって、日蓮宗寺院が多数存在する。殊に興津の地に文永11年（1274）に創建された妙覚寺は、小湊の在地土豪佐久間重貞の嫡子長壽庵が開基であるといわれており、佐久間氏が興津地域に強い影響をもっていたことがうかがわれる。

関東武家勢力を足利方と上杉方に二分した享徳の乱（1454）以降、各地において地域権力同士の抗争が相次ぎ、戦国の世の幕開けとも言われる時代に突入、安房三国は土気城、東金城を拠点とす

る康胤系千葉氏、長南城、真里谷城を拠点とする上総武田氏、白浜城、稲村城を拠点とする安房里見氏によって治められた。真里谷武田氏の内部抗争に端を発した戦乱は、天文13年（1544）武田朝信は、正木時茂・時忠との合戦に敗れ、同氏は滅亡した。正木氏はそのまま武田の居城であった小田喜城を攻め小田喜領は、正木氏に接収されたのである。小田喜城には正木時茂が在城し本拠となし、伊北庄南部の勝浦城・興津城・吉宇城などは安房里見氏の武将正木時忠が攻略し、勝浦城を本拠とした。興津城の築城は正嘉2年（1258）佐久間兵庫介重吉、同兵庫頭重貞の築城といわれている。天正8年（1580）には、里見義頼が正木憲時の有力な属城であった興津城を攻め込んだ際、時の妙覚寺住職日庵師が興津城攻めの陣所として同寺を提供するなど里見義頼に協力し、正木氏に使者を送って乱を終結させたのである。その後里見氏より恩賞として末寺四力寺が加えられている。天正18年（1590）豊臣秀吉による小田原開城と北条氏政・氏照兄弟の切腹によって北条氏が滅亡するや上総国は秀吉政権に没収され、関東一円が徳川家康の麾下になると自然廃城となった。

近世の勝浦市域には、勝浦藩植村氏や大多喜藩本多氏・阿部氏、岩槻藩大岡氏、高知新田藩山内氏、久留里藩黒田氏の各藩領や旗本知行地・幕府領・御三卿領があった。徳川家康の関東入国に伴い、一万石以上の上総国大多喜には本多忠勝が、久留里に大須賀忠政、佐貫に内藤家長、鳴渡に石川康道がそれぞれ配され、一万石以下では、五井に松平家信、茂原に大久保忠佐、勝浦には植村泰忠が配置されたのである。植村氏による領地支配は、宝暦元年（1751）の三代藩主恒朝の改易によって終わりを迎え岩槻藩に引き継がれた。近世における興津は「興津千軒」のたとえのごとく、太平洋を行き交う大型帆船の寄港地としてその栄華を今に伝える。東北地方から江戸に向かういわゆる東廻り航路は、近世に入って東北諸藩の貢租体系の確立に伴い急速に発達した。当初、勝浦沖の難所を避け、常陸那珂湊から湊沼に入り陸送を経て北浦から利根川に入るルートがとられたが、承応年間（1651～1655）に利根川と江戸川を結ぶ利根運河が完成すると銚子から利根川に入り、関宿から江戸川に入るルート（「銚子入内川江戸廻し」）が開発されたのである。しかし、寛文11年（1671）河村瑞軒によって房総沖を直行する東廻り航路（「東海大廻し」）が開発され、大いに時間の短縮がはかられた。瑞軒は、陸奥の平潟、常陸の那珂湊、下総の銚子、安房の小湊に立務場を置き、寄港の調査、連絡、遭難に備えさせた。殊に貢米船の幟のある船舶には充分な保護措置をとったと言われている。明和7年（1770）出版の『増補日本汐路之記』には、江戸から津軽青森まで17の湊があげられ、江戸から常州那珂湊までに港として指定しているのは「上総奥津」のみである。妙覚寺境内と興津港に残されている繋船用の繋船柱は、宮城県石巻附近の産出する粘板岩で通称「仙台石」と呼ばれる石材が用いられている。この繋船柱や市街地に残る仙台屋と呼ばれる漆喰壁の豪壮な旧家、気仙屋、若松屋などの屋号が示すように、興津港は仙台藩とのかかわりが深かった事を物語っている。仙台藩との関係を示す具体的な史料としては、鶴原の柴代家には安永2年（1773）の「松平陸奥守様御年貢米送状并浦賀御切手写」が伝来しており、明和9年（1772）の年貢米を積んで牝鹿港を出帆した三艘の船の積荷が記されている。また、民謡からも仙台藩との密接な関係が窺える。「米は（ニシラ・ミコシ）どつから来た 仙台から来たんべ 仙台は米のソーバ アラサイくらする」などと唄われていることから、仙台藩の米の産高が興津の景気に直接影響したことが窺える。興津港は、仙台藩ばかりでなく、津軽、南部等東北諸藩の外海江戸廻し廻船にも利用され、津料を妙覚寺に納めていたのである。『房総志料続篇』によると、「奥津 大船泊湾 ▽妙覚寺 日蓮宗大刹、御朱印廿五石、門前百姓十九軒、門下廿六ヶ寺、塔頭六坊 此奥津浦、妙覚寺持に付、諸国大船舶掛りするときに一艘銭二百匁。五下とは五百石已下を云ふと云へり」とあり、入港の船舶はすべて船着場一体を寺領とした妙覚寺に関税を納めていたことが理解できる。このように東廻り海運

は、江戸時代初期に米の輸送によって起り、江戸時代を通じて賑わったのである。特に江戸後期以降は、蝦夷地経営によって幕府の物資流通の拠点として、また文化・文政以降には、銚子入江戸廻し航運が衰えたことによって、益々隆昌を極めたのである。「大沢行川の嫁子になるな 花の奥津で乞食しろ 高い山から江戸店見れば 一つは金蔵娘蔵 興津港は巾着港 ほしいきんちゃこ紐がない 天竜山から富士見屋みれば お茶屋女が虱とる」などと興津の繁栄が歌われた。

勝浦沖は「鬼が島」とも呼ばれる海の難所で、多くの船がその犠牲になっている。同柴代家には天明4年（1784）和泉国岡田浦の17人乗りの網船が大風で難破し鶴原に漂着した様子が記録されている。その際積荷を捨て、髪を切って諸神に祈願したところ神風が吹いて難を逃れたとある。享和3年（1803）9月の「指上申一札之事」には、松部の砂子浦に破船のため上陸した仙台藩の廻米船に地元の漁師が乗り込んで米を略取しようとして仙台藩の番船に引き立てられたことや安永9年（1780）には安房国南朝夷村に清の商船が漂着し、岩槻藩士が武装して対応したことなどが記録されている。このように勝浦沖は、海運の要衝であると同時に海難が頻発する難所として知られていることから、本書に報告する興津浜に打ち上げられた陶磁器の多くが、沈船、捨荷などの経緯によって浜に寄りついた積荷の一部である可能性が推定されるのである。

（菅根・内川）

第4章 先史

第1節 土器（第4図、第1表、写真1）

表採資料中には縄文土器が10点と弥生土器が4点含まれているとされていたが、それらの土器片を改めて観察したところ、弥生土器とされていた土器はすべて古墳時代中期以降の土師器であることが確認できた。土器片はいずれも表裏面・断面の磨滅が著しく周縁部は丸みを持ち、浅い文様は辛うじて残存している状態である。縄文土器と認識された10点の内、文様等が比較的明確な以下の8点を図示した。

1は尖底を呈する深鉢形土器の胴下半部片である。磨滅が著しいが表面には縦位の撚糸文が施文されている。早期撚糸文系土器前半の井草式であろう。

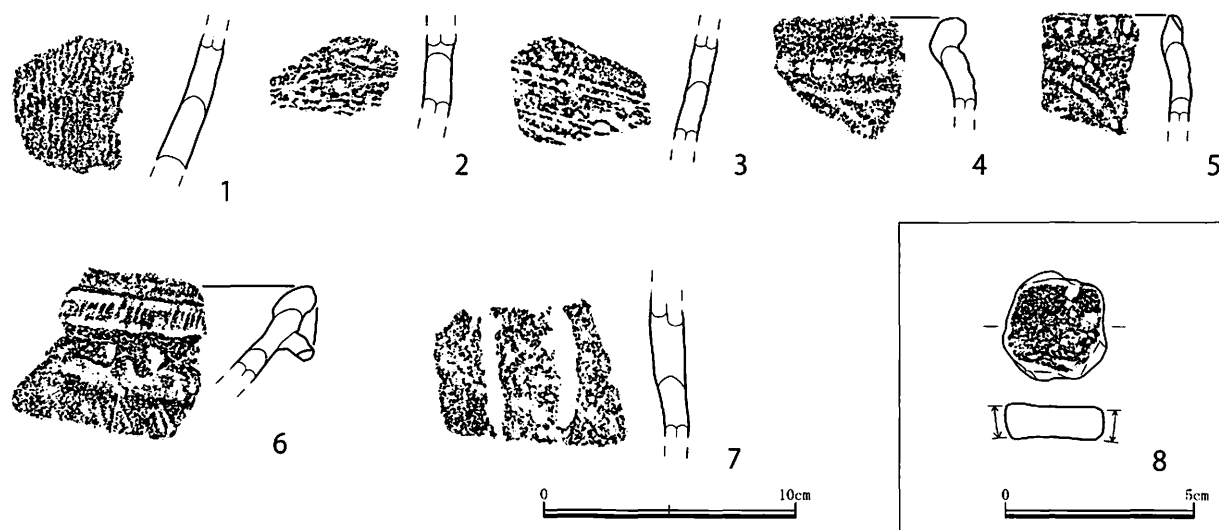
2・3は縄文前期の深鉢形土器胴部片である。2は胎土中に繊維を含み、地文は無節縄文で右下がり斜行する低い浮線文、同一方向に半截竹管文を施文していると推定される。3は胎土が緻密で硬質な土器である。地文は単節縄文で半截竹管による平行沈線文を右下がり斜方向に施文している。2は前期前半花積下層式土器、3は前期後半浮島Ⅱ式もしくは併行する諸磯b式土器であろう。

4・5・7は縄文中期中葉の深鉢形土器、6は浅鉢形土器である。4・5は口縁部片で、胎土中に大粒の長石や石英などの岩片と雲母を多量に混入する。4は肥厚する口縁部が弱く外反する。口唇部に刻みを施し、以下押引文を二重弧状に施文する。5は波状口縁を呈すると推定される。大きく肥厚する口唇部直下に押引文を配す。以下細い有節沈線により三叉文を施文する。中期中葉の阿玉台Ⅱ式で土器であろう。6は波状口縁を呈すると推定される。肥厚外反する口唇直下に指頭押捺した鐙状の高い隆帯を巡らせ、口縁部文様帯とし、半截竹管によるキャタピラ文を横行させている。中期中葉の勝坂式土器であろう。

7は口縁部が大きく張り胴部で括れるキャリパー形を呈する深鉢形土器胴部片である。垂下する太い沈線により胴部文様帯を区画する。地文は無節縄文で沈線区画内には磨消し縄文を施す。中期後半加曾利EⅣ式土器であろう。胎土に赤褐色粒子と骨針状粒子を混入する。

8は深鉢形土器口縁部片を利用した土製円盤である。周縁部は打ち欠きにより成形される。胎土には赤褐色粒子と微細な骨針状粒子を多く含む。7と胎土が類似しており中期後半の土器であろうと推定される。

(小池)



第4図 縄文土器・土製品

第 1 表 縄文土器・土製品観察表

遺物No.	器種	法量(mm)	特徴(①色調②焼成③胎質)	調 整	備 考
1	深鉢 胴部	-	①外：茶褐色～淡茶褐色 内：灰褐色 ②良好 ③硬質・緻密 小砂粒 長石 雲母 大赤褐色粒子	外：縦位燃糸文 内：ナデ？	器面荒れている
2	深鉢 胴部	-	①外：淡褐色 内：淡褐色 ②良好 ③やや硬質 繊維含む 小砂粒 長石 骨針？	外：低隆帯に刻み 以下斜行半截竹管 地文無節縄文 内：ミガキ？	器面荒れている
3	深鉢 胴部	-	①外：淡褐色～淡黒褐色 内：黒褐色 ②良好 ③硬質 小砂粒 長石 骨針？	外：斜行半截竹管 地文縄文？ 内：ナデ？	器面荒れている
4	深鉢 口縁部	-	①外・内：淡茶褐色 ②良好 ③やや硬質 小砂粒 大粒長石 大石英 大雲母	外：口唇部外反 直下角押引文 二重弧状押引文 内：ナデ？	器面荒れている
5	深鉢 口縁部	-	①外・内：茶褐色 ②良好 ③やや硬質 小砂粒 大長石 大石英多い 雲母 赤褐色粒子	外：口唇部外反 直下角押引文 細い有節沈線 文による楕円・三角形区画 内：ナデ？	器面荒れている
6	浅鉢 口縁部	-	①外・内：黒褐色～淡黒褐色 ②良好 ③やや硬質 小砂粒 大長石 大石英多い	外：口唇部肥厚と指頭オサエ施文鈐状隆帯による口縁部文様帯区画 区画内キャタビラ文充填 波状口縁？ 内：ミガキ？	器面荒れている
7	深鉢 胴部	-	①外：淡茶褐色 内：淡黒褐色 ②良好 ③やや硬質 小砂粒 長石 大茶褐色粒子	外：太い沈線の楕円区画磨消縄文帯 地文無節縄文？ 内：ナデ？	器面荒れている
8	土製 円盤	長さ：29 幅：27 厚さ：9	①表：茶褐色 裏：黒褐色 ②良好 ③硬質 小砂粒 長石 赤褐色粒子多	外：低い横行隆帯 以下キザミ？ 内：ナデ？	器面荒れている 深鉢形土器口縁部

第 5 章 古代・中世

第 1 節 古墳～平安時代（第 5 図、写真 2）

古墳時代から平安時代の遺物としては、土師器 9 点（甕 8 点・高坏 1 点）、須恵器 418 点（甕 348 点・瓶類 41 点・坏皿類 28 点・高坏 1 点）を確認している。ほとんどが古墳時代後期から平安時代の遺物であり、須恵器の量が圧倒的に多い。このうち図示したのは 9 点である（1～9）。

1 は土師器の甕の底部であり、肉厚で、内部には接合痕が残る。やや粗雑なつくりで製塩土器の可能性がある。時期は奈良・平安時代の可能性が高い。2 は土師器の高坏の脚部で、外面はミガキが施されていたと推定されるが摩耗して確認できなかった。古墳時代中期のものと考えられる。3 は須恵器の坏身で、6 世紀のもの。4 は須恵器の高坏で長脚になり、透かしをもつタイプ。無理に実測したため、法量には少しずれが生じる可能性がある。時期は古墳時代後期である。5 は須恵器の長頸瓶の頸部で表面は茶褐色を呈する。海中にあったため、貝殻等の付着物で覆われている。時期は奈良・平安時代。6 は須恵器の長頸瓶の口縁部。7～9 は須恵器の甕で、7 は底部であり、外面にタタキ目が施されている。8 は口縁部で、外面に櫛描きの波状文が施されている。9 は胴部の破片で平行タタキ目が外面に施される。

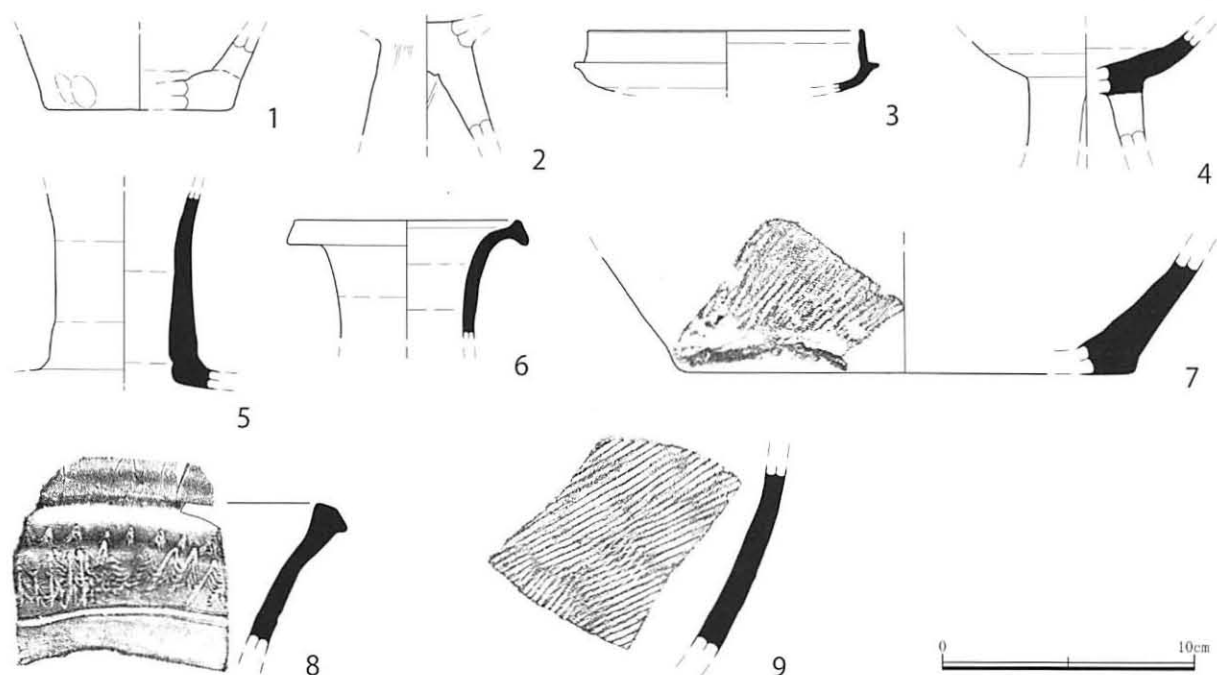
第 2 節 中世（第 6 図、写真 3）

中世の遺物としては、常滑系の焼締陶器 72 点（甕・壺 70 点・片口鉢 2 点）、渥美系の焼締陶器 3 点（甕・壺 3 点）、備前系の焼締陶器 3 点（瓶類 2 点・鉢類 1 点）、山茶碗系陶器 9 点（鉢類 9 点）、瀬戸・美濃系陶器のうち古瀬戸系陶器 26 点（壺瓶類 4 点・碗鉢類 12 点・皿類 10 点）、大窯系陶器 11 点（皿類 9 点・天目碗 2 点）、舶載陶磁 3 点（龍泉窯系青磁碗 2 点、華南系白磁碗か 1 点）を確認している。多くが中世後半の製品だが、青磁類や渥美系陶器など中世前半の製品も少量含まれる。うち 10 点を図示した（10～19）。

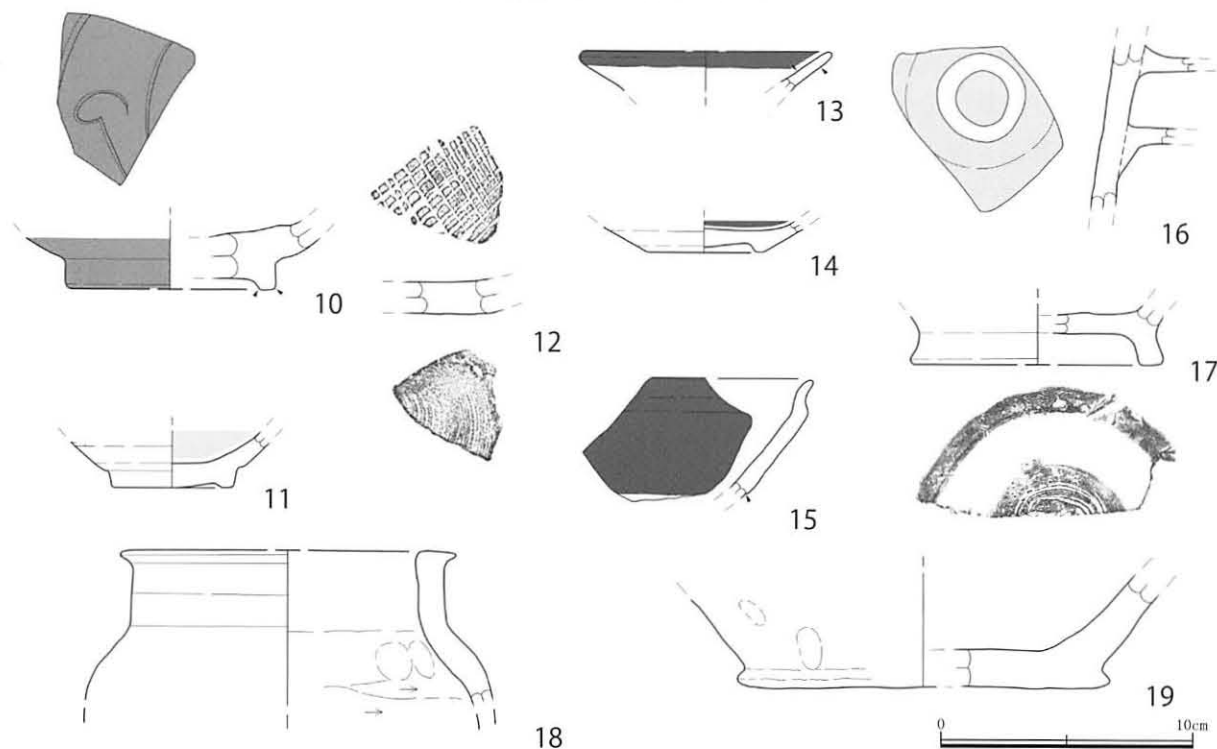
10 は龍泉窯の青磁碗の底部で内面に劃花文を施すもの。見込みに靈芝状の文様を片彫りしており、12 世紀後半～13 世紀前半の製品。11 は古瀬戸後期の平碗の底部で内面は淡緑色の釉が掛かっている。15 世紀の製品である。12 は古瀬戸の卸皿である。13 は鉄釉を施した縁

釉皿。瀬戸・美濃の15世紀の製品。14は内面に鉄釉を施した香炉であり、碁笥底の底部である。16世紀の製品の可能性がある。15は天目茶碗で露胎部に鉄錆を塗った16世紀のもの。16は柄付片口で、柄部の根本のみが残る。古瀬戸中・後期の製品で淡緑色の古瀬戸釉が施される。17は古瀬戸の壺の底部で、上部は無いが四耳壺または三耳壺である可能性が高い。13・14世紀のものだろう。18は常滑焼の壺で16世紀の製品。19は常滑焼の壺または甕の底部。

(富永)



第5図 須恵器・土師器



第6図 磁器・陶器・焼締陶器

第6章 近世以降

第1節 陶器

(第7～9図、第2・3表、写真7～10・17)

採取された陶器のなかで、出来るだけ遺存状態の良好なもの、また江戸時代を代表する器種を抽出して述べることにする。陶器は、採取された遺物のなかで最も器種が豊富であり、かつ量も膨大である。ところが、磁器に比べて大型の製品が多いのにも関わらず、遺存状態は概して不良であった。これは磁器に比べて軟質であるという特徴によるものと考えられる。但し、小型の製品については完形ないし半完形品も見受けられた。遺物の年代については、主として生産地編年に拠るが一部消費地編年も併用した。図に掲げた製品についての法量などは観察表を参照されたい。

1～3は碗類である。1は鉄釉丸碗である。発色の良い赤味の強い鉄釉を体部外面と高台を除く全面に施釉する。器形は小服茶碗と類似する点から見て1770年代以降と推定される。2は肥前産の京焼風陶器碗である。見込に鉄絵で山水楼閣文を描き、内面に目跡が3つあり、胎土は精良で緻密である。当該遺物は1690年代から1770年代に生産されたが、本作品は作行が粗雑な点から見て18世紀以降に降るものと推定される。3は灰釉鉄釉掛け分け碗である。ロクロ成形で付高台である。4は太白手広東碗である。陶胎に染付で外面に渦文様、内面の口縁近くに圈線文を廻らしている。18世紀末から19世紀第2四半期の製品と推定される。

5～11は皿類である。5は口縁部をすべて欠いた鉄絵皿である。胎土は黄白色を呈し、見込に松葉文を鉄絵で描き、灰釉を底部と高台を除く全面に施している。いわゆる古唐津に分類されるもので、所属時期は1590年から1610年代と推定される。写真7は図示しなかった古唐津・織部の破片である。唐津の釉薬は灰釉がほとんどで、鉄絵の製品が1点ある。器種は平向付、皿、碗でいずれも小品である。写真8・9は二彩唐津、三島唐津の製品であるが、1690年代から1740年代であ

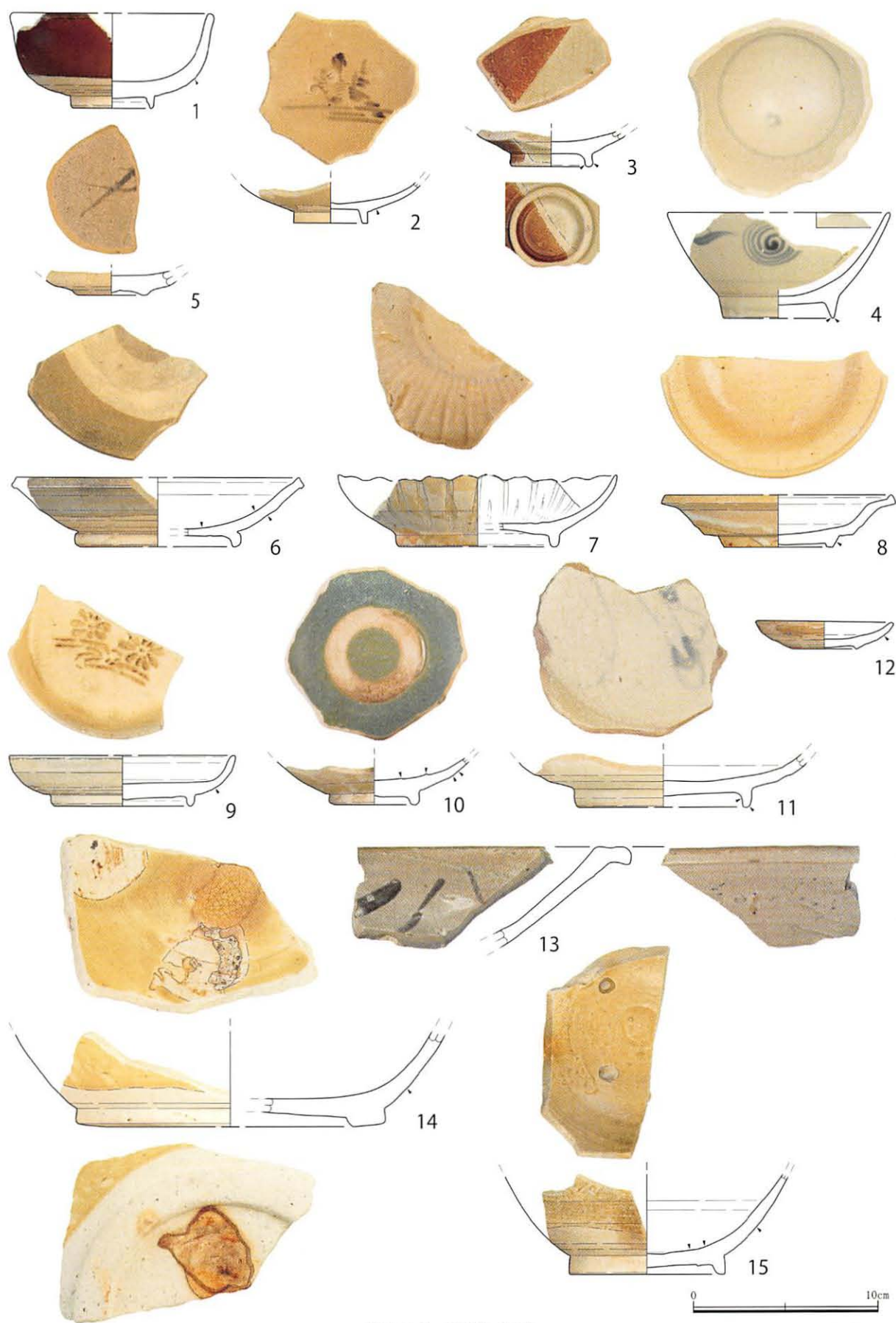
第2表 陶器器種組成表

推定生産地	器 種	個体数	破片数	備考
志戸呂	灯明受皿	0	3	
	灯明皿	1	0	
	壺	1	0	
瀬戸・美濃	碗	48	0	
	天目	9	0	
	白天目	1	0	
	小碗・小盃	59	0	
	摺絵皿	2	27	
	菊皿	2	24	
	灰釉皿	16	0	
	鉢	24	17	
	片口・捏鉢	3	0	
	擂鉢	4	0	
	大鉢	7	0	
	甕	0	17	
	壺類	0	47	
	蓋	31	0	
	仏飯器	8	0	
	火入れ・植木鉢	0	9	
	鍋類	0	3	
	香炉	10	0	
	灯明皿	12	0	
	灯明受皿	8	64	
台付灯明受皿	9	0		
灯火器	1	0		
乗燭	11	0		
二合半徳利	4	0		
五合・一升徳利	12	14		
ペコカン徳利	2	0		
常滑	甕	0	1	
京都	碗	1	0	
	皿	0	1	
	火入れ	0	3	
丹波	擂鉢	7	0	
明石・堺	擂鉢	9	0	
備前	瓶	1	1	
	擂鉢(桃山)	0	1	
	瓶(桃山)	0	2	
	呉器手碗	8	0	
	京焼風陶器	8	3	
肥前	陶胎染付	2	7	
	刷毛目碗	9	6	
	現川碗	5	12	
	銅緑釉碗	8	18	内ノ山窯
	銅緑釉・透明釉皿	67	98	内ノ山窯
唐津	鉢	11	0	後期唐津
	皿・鉢	2	6	古唐津
	碗	0	2	古唐津
合 計		423	386	

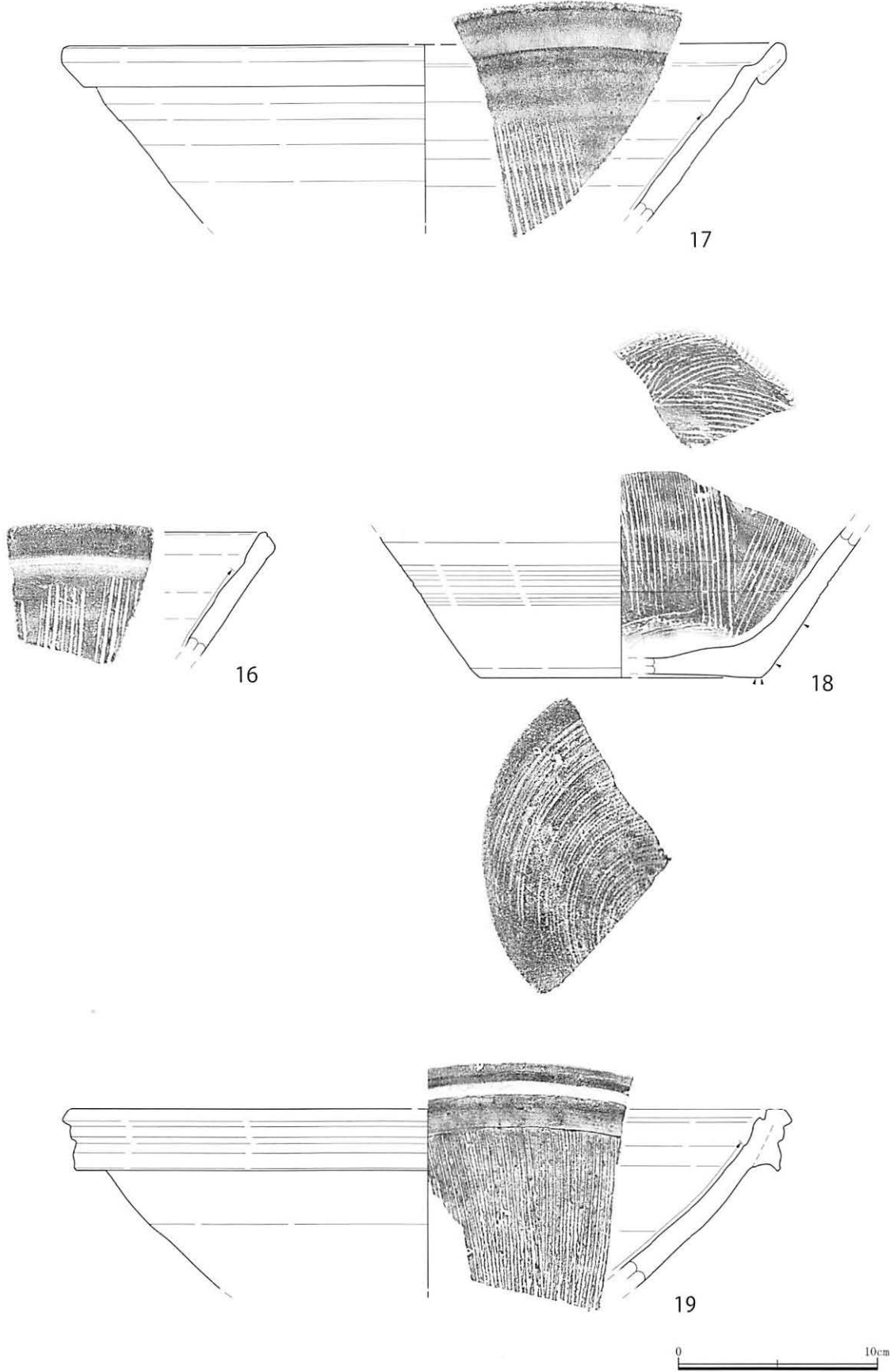
る。6は灰釉輪剥皿である。口縁部の断面が三角形で付高台である。1730年代から1770年代の製品である。7は灰釉菊皿である。ロクロ型打ち成形で花卉と花卉の間に一本の沈線がある。内面の釉の剥落部には布目が認められるが、型離れを良くするために型を布で覆ったことが分かる。1670年代から1740年代の製品である。8は灰釉稜皿である。口縁部をやや内側に折り返し、腰部に稜があるのが特徴である。高台は削り出しで1630年代から1700年代の製品である。9は摺絵皿である。ロクロ成形、付高台で内面に鉄釉で菊花に流水文を摺絵で施す。1710年代から1800年代の製品である。10は銅緑釉輪剥皿である。見込みと腰部過半から高台を除く全面に銅緑釉を施釉する。産地は肥前内ノ山窯で1650年代から1730年代の製品である。11は太白手皿である。口縁部をすべて欠いており全体の大きさは不明である。内面に染付で草花文を描いている。12は灰釉小皿

第3表 陶器観察表

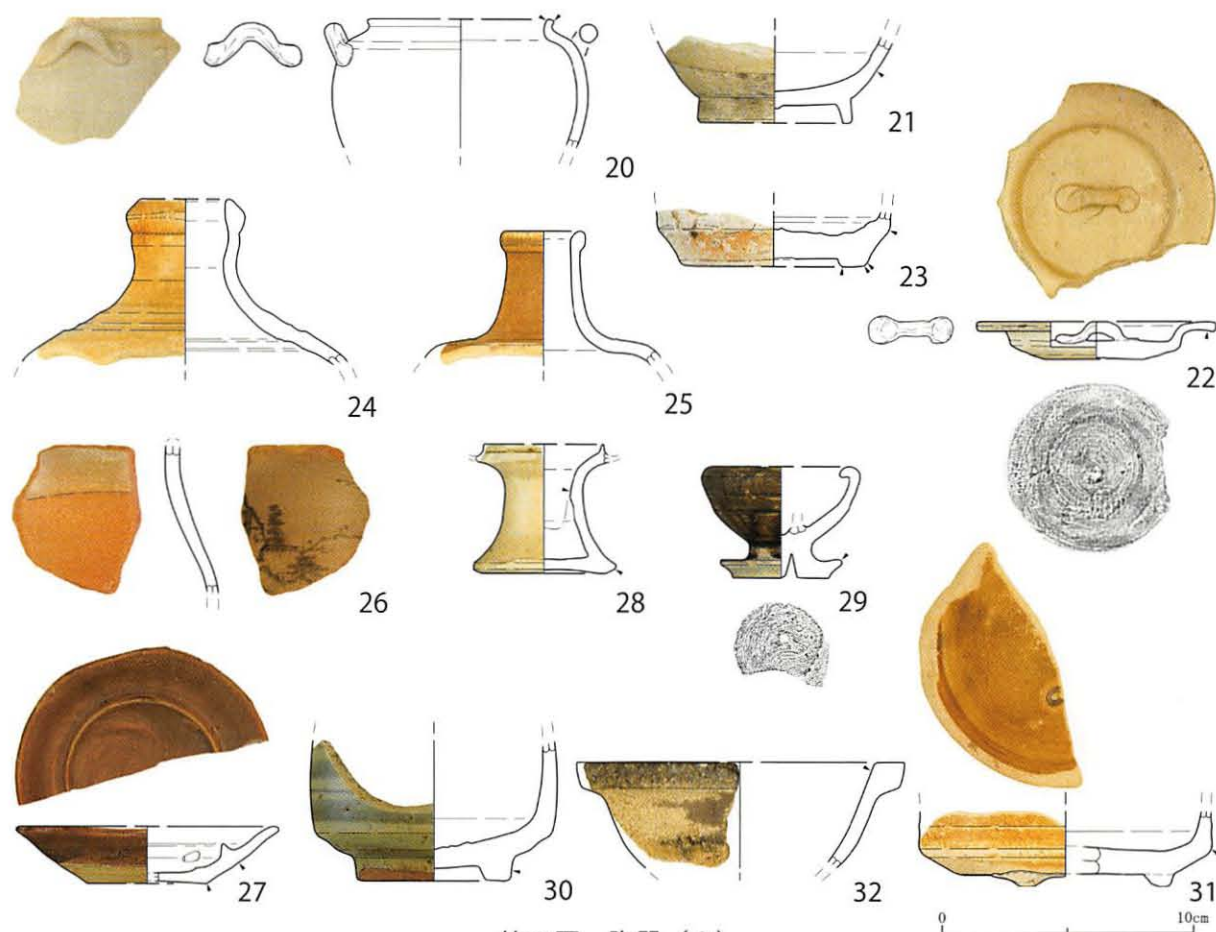
遺物 №	胎質	推定 生産地	器種	法 量(mm)			慣用名	釉 薬	備 考	推定製作年代
				口径	底径	器高				
1	陶器	瀬戸・美濃	碗	(106.0)	42.0	51.0		鉄釉(赤味強い)	薄茶碗の器形?	
2	陶器	肥前	碗	-	40.0	>21.5	薄茶碗	鉄絵・透明釉	見込み目跡3 肥前京焼風陶器	1690~1770年代
3	陶器	瀬戸・美濃	皿	-	40.0	>29.0		灰釉・鉄釉	釉掛け分け 付高台	
4	陶器	瀬戸・美濃	碗	(119.0)	(58.0)	57.0	広東碗	染付・透明釉		18世紀末~ 19世紀第2四半期
5	陶器	唐津	皿	-	35.0	>13.0		鉄絵・灰釉	古唐津	1610年代 桃山~江戸初期
6	陶器	瀬戸・美濃	皿	(152.0)	(82.0)	37.0		灰釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 口唇部断面三角形 付高台	1730~1770年代
7	陶器	瀬戸・美濃	皿	(149.0)	(83.0)	38.0	菊皿	灰釉	型打ち成形 付高台	1670~1740年代
8	陶器	瀬戸・美濃	皿	(121.0)	59.0	28.0	稜皿	灰釉		1630~1700年代
9	陶器	瀬戸・美濃	皿	(120.0)	73.0	27.0	摺絵皿	鉄絵・灰釉		1710~1800年代
10	陶器	肥前 (内ノ山窯)	皿	-	43.0	>25.0	輪剥皿	銅緑釉・透明釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ 高台無釉 付高台	1650~1730年代
11	陶器	瀬戸・美濃	皿	-	(90.0)	>29.0		染付・透明釉	太白手	
12	陶器	瀬戸・美濃	皿	71.0	33.0	15.5		灰釉	外面胴~底部無釉	
13	陶器	瀬戸・美濃	鉢	(390.0)	-	>55.0	笠原鉢	鉄絵・透明釉		1650~1750年代
14	陶器	瀬戸・美濃	捏鉢	-	(132.0)	>52.0		灰釉	目跡2	
15	陶器	瀬戸・美濃	鉢or片口	-	83.0	>63.0		灰釉	見込み目跡2	
16	炆器	不明	掃鉢	(390.0)	-	>62.0		櫛目5本/1条		
17	陶器	瀬戸・美濃	掃鉢	(354.0)	-	>89.0		鉄釉	櫛目10本残存	藤沢Ⅰ類
18	陶器	瀬戸・美濃	掃鉢	-	(140.0)	>75.0		鉄釉	内面使用痕多い 回転糸切底	
19	炆器	堺	掃鉢	(356.0)	-	>90.0			櫛目9本/1条 内面火摺	
20	陶器	瀬戸・美濃	壺	(70.0)	-	>50.5	灰釉双耳壺	灰釉		
21	陶器	瀬戸・美濃	壺	-	(60.0)	>34.0	うるか壺	灰釉		
22	陶器	瀬戸・美濃	蓋	(90.0)	38.0	15.0		灰釉	回転糸切底	
23	陶器	瀬戸・美濃	瓶	-	(70.0)	>22.0		鉄絵・長石釉		1600~1620年代
24	陶器	瀬戸・美濃	瓶	(34.0)	-	>65.0		灰釉	一升徳利	1780~1820年代
25	陶器	瀬戸・美濃	瓶	30.0	-	>53.0	べこかん徳利	鉄釉		
26	陶器	肥前	灰落し	-	-	>59.0		鉄絵・透明釉		
27	陶器	志戸呂	灯明受皿	(100.0)	(47.0)	22.5		鉄釉		
28	陶器	瀬戸・美濃	灯明受皿	(48.0)	49.5	51.0		灰釉	底部無釉	
29	陶器	瀬戸・美濃	采燭	(53.0)	37.0	44.0		鉄釉	回転糸切底	
30	陶器	肥前	火入or香炉	-	57.0	>55.5		染付・透明釉		1690~1740年代
31	陶器	瀬戸・美濃	香炉	-	(84.0)	>30.0		灰釉	見込み目跡1	
32	陶器	不明	鉢	(130.0)	-	>42.0		鉄釉	胎土: 径1~2mmの砂粒 を多量含む	近代



第7図 陶器 (1)



第8図 陶器・炆器（2）



第9図 陶器 (3)

である。ロクロ成形で削り出し高台である。外面腰部から高台を除く全面に灰釉を施す。13は笠原鉢の小破片である。口縁部を外側に折り返し、鉄絵で秋草葉文を描くのが特徴である。1650年代から1750年代と長期に渡り生産されたが、本資料は18世紀代と推定される。14は灰釉大鉢である。見込に大きな目跡が2つ残存するが、本来は4つあったと推定され、底部には重ね焼きにより生じた大きな目跡が1つある。15は灰釉鉢である。腰部から上を欠失しているが片口若しくは鉢であろう。見込に重ね焼きによる目跡が2つ残存する。

16～19は播鉢で、16・17・18は瀬戸・美濃産で、19は堺産である。16は口縁部の小破片である。全面に鉄釉を施し、9本を1単位とする櫛目がある。17は口縁部を外側に折り返し、均等な櫛目は9本確認できる。全面に鉄釉を施している。18は大きな底部破片である。ロクロ成形で底部回転糸切底である。内外面に鉄釉を施し、櫛目は内面、見込内に認められるが、1条の単位数は不明である。櫛目は使用による摩滅が顕著に認められる。19は腰部から上に破片で、口縁部を外側に折り返し、三段の稜を意図的に作り出している胎土は16・17・18と大きく異なり、赤褐色を呈する無釉の炻器質である。2mm～5mmの長石（白色小石）を含み、赤土内に白色土がマーブル状に見られる。櫛目は9本を1条の単位としている。

20～22は灰釉双耳壺の破片資料である。20は腰部から口縁部までの破片で、横貼りの耳が2つ付いているのが特徴である。21は腰部から底部の破片で高台と内面を除き灰釉を施している。底部は削り出しにより作り出されている。22は灰釉の落とし蓋で、頂部につまみを貼り付けている。ロクロ成形で底部は回転糸切りされ、端部は水平に折り返している。灰釉は蓋の上面にのみ施されている。これらは慣用名として「うるか壺」と称され半液体を貯蔵する容器と考えられている。23

は長石釉鉄絵瓶の底部破片である。ロクロ成形で底部を削り出している。外面に僅かに鉄絵が認められる。17世紀前半の瀬戸・美濃産の製品である。24は灰釉一升徳利の肩部から口縁部の破片である。ロクロ成形で破損箇所粘土の継ぎ足しが確認される。口縁部は指で撫でて作り出している。1780年代から1820年代の瀬戸・美濃産である。25はぺこかん徳利の肩部から口縁部にかけての資料である。ロクロ成形で口縁端部を指で撫で作り出している。内外面に鉄釉を施している。また写真10は備前の瓶の破片であるが、瓶類で一番古いもので、桃山時代と推定される。26は鉄絵灰落としと推定される胴部破片である。鉄絵は山水楼閣文で、胎土は赤褐色を呈し、外面と内面上端に灰釉が施され、肥前産と推定される。27は燈火受付皿である。全面に鉄釉を施し、外面腰部過半は釉を拭いとしている。志戸呂産である。28は台付燈火受付皿である。ロクロ成形で底部は回転糸切底で、底部を除く全面に灰釉を施している。瀬戸・美濃産である。29は鉄釉乗燭である。腰部からなだらかに立ち上がり、口縁端部で大きく内湾する。ロクロ成形で底部は回転糸切底で底部に穿孔があるが、これは底面が肥厚なために焼き膨れを無くすためのものと推定される。瀬戸・美濃産である。30は香炉若しくは火入れである。ロクロ成形で高台を削り出し、外面に染付けで圈線を描き透明釉を施す。産地は肥前で、1690年代から1740年代の製品と推定される。31は灰釉香炉である。ロクロ成形で底部を糸切し、足を貼り付けている。内外面に黄色味の強い灰釉を施す。瀬戸・美濃産の製品である。32は鉄釉の七厘上部の破片である。胎土は1mm～2mmの砂粒を多量に含み全面に鉄釉を施している。産地、時期はともに不明である。

表2は、陶器を産地と器種別に完形資料、破片資料の別を示したものである。産地は地理的にみて勝浦に近い順に志戸呂、瀬戸・美濃、常滑、京都、丹波、堺・明石、備前、肥前（唐津）としたが、瀬戸・美濃産の占める割合が非常に高い。全体の60%以上を占めている。これは東日本における近世遺跡と同様の傾向を示している。また、特徴的なのは肥前産の占める割合も同じ傾向だが、特に内ノ山窯と推定される銅緑釉、透明釉の碗や輪剥ぎ皿の占める割合も多いことである。江戸遺跡では代表的な雑器のひとつである。この点については陶磁器の総括を参照されたい。

文字資料

陶磁器のなかで高台内や底部に墨で文字が書かれている製品を文字資料として報告する（写真12）。また二次的な穿孔された製品についても取り上げた。1・2は磁器である。1は、肥前産半筒碗である。「工」と線描きされている。1760年代から1810年代の製品である。2は瀬戸・美濃産端反碗である。焼継ぎ時に上絵でサインされ焼成されたが、上絵が剥落した痕跡が認められる。「△」か。焼継ぎ職人のサインであろう。3から15は陶器で、すべて瀬戸・美濃産である。3は灰釉小盃であるが底部に穿孔が認められる。4は半球碗で、「イシ」と書かれている。5は刷毛目碗で、「ㇿ」とある。1760年代から1830年代の製品である。6は鉄釉碗である。7は灰釉皿で、中心に「二」の欠けた文字がある。8は灰釉香炉と推定される。9は灰釉瓶類と推定されが、「ユキ乃」と読める。10・12から15は灰釉鉢若しくは片口である。11は瓶類と推定される。

文字が欠けていたり不鮮明であったりするものが多く残念であるが、このような陶磁器に文字が書かれた資料は、所有者の名前、使用された店の屋号、使われている場所（部屋名）などが記されている場合が多い。「イシ」や「ユキ乃」などは名前であろうか。

これらの資料はいずれも消費地遺跡から出土する特徴的な資料である。当興津浜採取の資料においては鉢類が多い。これらの器が家内から外に持ち出され使用されたことを示唆している。例えば豆腐などの液体・半液体を入れた食品の運搬などに用いられたのかもしれない。（惟村）

第2節 磁器（第10～14図、第4～7表）

表採資料の過半は、近世陶磁器であった。このうち磁器が943個体で全体（1,335個体）の約7割が磁器であった。遺物群としての評価は、後述の「近世陶磁器の様相」を参照されたい。

1は肥前高台無釉の初期伊万里碗である。高台無釉の製品は、寛永14（1637）年の有田・伊万里における窯場整理統合後に多く生産される。高台断面を逆台形に成形するなど内野山窯の銅緑釉の碗などにも共通し、1630年代頃から始まる景德鎮や福建諸窯で生産された製品を写しているものと考えている。1640年代頃の製品であろう。2は肥前磁器初期伊万里碗である。底部から外面の下半に褐釉が施し、掛け分けられている製品である。こうした製品は猿川窯、山小屋窯などで類例が多く確認されている。1640年代頃の製品であろう。3は肥前染付碗である。見込み中央に「大明成化年製」が書かれる。高台裏に銘款が施されるが、この不明字の銘款は、長吉谷窯など1650年代に操業した窯から類例が多く確認される。1650年代頃の製品であろう。4は肥前磁器薄手の半球形碗である。このタイプの碗は、江戸遺跡では1680年代頃から出現するが、出現期には高台裏に銘款を伴う製品が多い。唐草文様の描き方から18世紀前半の製品であろう。5は肥前染付磁器碗である。二重角枠内に「筒江」銘が施されており、山内町の筒江窯で作られた18世紀中葉頃の製品であろう。6は肥前染付碗である。高台がやや小さく、全体も小振りである。江戸遺跡では17世紀末～18世紀初頭に多い碗形である。7は肥前染付碗である。見込みにはコンニャク判五弁花、銘款は二重角枠内渦福である。コンニャク判は、主文様、見込み文様として1680年代頃から19世紀に入る前後頃まで使われる装飾技法である。このうちコンニャク判五弁花は初期の上手の製品ほど精緻になるが、本例も花卉の内側に副弁があり、比較的丁寧なものであろう。18世紀前葉頃の製品であろう。

8、10～15はいわゆるくらわんか碗と称される肥前の厚手粗製の染付碗である。おおむね文様は精緻→簡便、器高は高い→低いものへと変化している。長崎県波佐見諸窯で多く生産されており、18世紀頃から19世紀前葉頃まで生産年代は長い。8の見込みはラフなコンニャク判五弁花である。14、15はラフなコンニャク判で主文様が描かれている。15は重ね詰みのために見込みを蛇ノ目に釉を剥いでいる。18世紀後半頃の製品であろう。9は肥前染付碗である。本例もくらわんか碗の範疇でとらえることができると思われるが、大振りで高台がやや高く幅広に成形され、文様も丁寧に描かれている。波佐見の高尾窯で類例が認められる。17世紀末頃の製品であろう。16は粗製の青磁染付碗である。このタイプの青磁染付は18世紀後半に有田の広瀬向窯などで量産される。18世紀後半頃の製品であろう。17は本例もくらわんか碗の範疇でとらえられる肥前染付碗である。文様はやや細かく、裏銘も二重角枠内渦福で、18世紀前葉～中葉にかけての製品であろう。18～21は肥前のいわゆる筒形碗である。このタイプの筒形碗は18世紀後半～19世紀初頭にかけて盛行する。『守貞漫稿』に記載がある「筒茶碗」と同形であり、同碗は文化頃まで使われ、下品用であるとの解説は江戸の調査成果と整合する。20、21は器面と見込みに丸枠内に「大」と染め付けられており、類例は少ない。特注品であろうか？22、23は肥前の染付小丸碗である。大橋康二氏が小丸碗A類と分類したもので（佐賀県立九州陶磁文化館1986）、18世紀後半～19世紀初頭頃に盛行する。23の見込みにはコンニャク判五弁花が押されている。24は肥前染付広東碗である。高台が高く作られている碗形が特徴で、初期の製品は口縁部が端反る、銘款が付く、大振りである傾向が伺える。本例は19世紀前葉の製品であろう。25は肥前染付二重格子文端反碗である。瀬戸・美濃の端反碗には、用途によって小法量（飲酒用）、中法量（喫茶、飲酒用）、大法量（飯用）など大きさ

のバリエーションが見られるが、肥前は大法量の製品が多くを占める。本例は波佐見で多く出土している粗製の製品で、19 世紀中葉頃の製品であろう。

26～29、32 は瀬戸・美濃の染付端反碗である。瀬戸・美濃は 19 世紀初頭に磁器生産を開始し、清朝磁器を模倣した本例のような端反形の茶碗を都市部に供給して磁器のシェアを拡大した。端反の開き、銘款の有無、高台の調整、径高比などに年代的な差異が認められる。32 は高台を幅広に成形しており、幕末に近い特徴が伺える。これらは 19 世紀中葉頃の製品であろう。30 は肥前外面褐釉が施された製品である。器面には糸目のような細かい条線が施されている。見込みは蛇ノ目に釉剥ぎされており、アルミナが塗布されている。18 世紀後半以降の製品であろう。31 は肥前染付湯呑碗である。大橋康二氏が小丸碗 B 類と分類したもので、1820 年代以降盛行する。33～36 は小型の碗形製品で、33～35 が染付、36 が白磁である。法量、扁平な形態から紅皿として利用されていたものと推定される。文様などから 33、34 が 18 世紀前半頃、35、36 が 18 世紀後半頃の製品であろう。37 は粗製の肥前染付坏である。18 世紀中葉～後葉の製品であろう。38 は瀬戸・美濃系染付坏である。呉須が淡青色を呈し、細かい文様が描かれ、いわゆる「関西系」とも評価される製品で、19 世紀中葉頃ののものであろう。39 は粗製の肥前染付坏である。63 は底部無釉の中国景德鎮窯の青花坏である。底部無釉の製品は、大坂や堺では 1615 年の大坂夏の陣に伴う火災層からは確認されておらず、それ以降の魚市場に伴う OJ92 - 18 SK403 などから出土している製品である。本例も元和～寛永期頃の製品であろう。40 は肥前染付坏である。碗形や文様構成はいわゆる小広東碗に類似していることから、本例も 1770～80 年代頃の製品であろう。41 は小型の肥前染付猪口である。18 世紀後半～19 世紀前半頃の製品と思われる。

42、43 は肥前染付蛇ノ目釉剥ぎの皿である。蛇ノ目釉剥ぎの製品は、18 世紀前葉までは高台無釉製品が主流であるが、中葉以降本例のような高台施釉で、蛇ノ目の径が小さく、斜格子文が描かれている製品や蛇ノ目が大きくラフな蔓草が描かれている製品が増加する。42 は蛇ノ目部にアルミナが塗布されていないことや文様に花が描かれていることから 18 世紀前半頃、43 は 18 世紀中葉～後葉頃の製品と思われる。44、45 は粗製の肥前染付皿である。共に見込みにはコンニャク判五弁花が施されている。18 世紀中葉～後葉頃の製品と考えられる。46 は白磁の型打ち皿である。蛇ノ目凹形高台の高台高の高いタイプで、19 世紀中葉頃の製品であろう。47、48 は肥前染付鉢（あるいは碗か？）である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、釉剥ぎ部にはアルミナが塗布されている。類例は波佐見の永尾本登窯など多くで出土しており、19 世紀前葉～中葉頃の製品と思われる。47 の見込みのはコンニャク判五弁花が押されている。49 は肥前染付鉢（あるいは碗か？）である。蛇ノ目釉剥ぎはされていないものの、47、48 と同形である。19 世紀前葉～中葉頃の製品である。50、51 は肥前の染付八角鉢である。50 は文様などがややラフに描かれている。51 は蛇ノ目高形高台の高いタイプの高台である。共に 19 世紀中葉頃の製品であろう。

52、53 は肥前青磁香炉である。52 は三脚の貼り付け、53 はかまぼこ状に挟られている。18 世紀後半頃の製品か？ 54 は半菊文が描かれている肥前染付仏飯器である。脚の作り、文様から 18 世紀後半頃の製品と考えられる。55 は肥前瑠璃釉瓶子形の御神酒徳利である。御神酒徳利は窯の谷窯から多く出土している。形態から 19 世紀頃の製品と考えられる。

56 はたこ唐草文の肥前染付御神酒徳利である。18 世紀末～19 世紀中葉の製品だろう。57 は染付瓶である。「五口」と染め付けられるが、管見の限り類例はなく解読できない。18 世紀後半以降の製品であろう。58 は肥前白磁戸車である。19 世紀の製品であろう。59 は肥前染付銚子形の水注である。文様の描き方から 18 世紀後半頃の製品であろう。60 は肥前青磁染付碗の蓋である。見込

み中央には手描き五弁花、ツマミ内には二重角枠内渦福の銘款が丁寧に描かれている。18 世紀後半の製品であろう。61 は肥前染付広東碗の蓋である。胎土・呉須の色調、文様の精緻さなど上手の製品である。ツマミ内には銘款が描かれ、広東碗初期 18 世紀末頃の製品であろうと考えられる。62 は肥前端反碗の蓋である。19 世紀前葉～中葉の製品である。63 は肥前染付合子の蓋である。文様の描き方、呉須の色調などから 19 世紀前葉～中葉の製品と推定される。

64 は中国福建・広東の高台無釉青花碗である。仙芝祝寿文が染め付けられていることから 19 世紀中葉頃の製品であろう。65 は福建・広東の漳州窯系青花磁器大皿である。いわゆるスワトウタイプで、16 世紀末～17 世紀前葉の製品である。66 は景德鎮窯青花皿である。質的にはそれほど高いものではないが、いわゆるカラックタイプである。17 世紀前葉の製品であろう。

第 4 表 磁器観察表 (1)

遺物 No	胎質	推定 生産地	器種	法 量(mm)			慣用名	釉 薬	備 考
				口径	底径	器高			
1	磁器	肥前	碗	-	41.0	>34.5	初期伊万里	染付	高台無釉
2	磁器	肥前	碗	-	(41.0)	>29.0	初期伊万里	染付	底部褐釉
3	磁器	肥前	碗	-	(45.0)	>15.5	半球碗	染付	不明字銘
4	磁器	肥前	碗	-	40.0	>30.0		染付	
5	磁器	肥前	碗	-	42.0	>22.0		染付	「筒江」銘
6	磁器	肥前	碗	-	(34.0)	>32.0		染付	「大明年製」銘
7	磁器	肥前	碗	-	47.0	>32.0		染付	渦福
8	磁器	肥前	碗	-	(54.0)	>28.5	くらわんか碗	染付	「大明年製」銘
9	磁器	肥前	碗	(109.0)	43.0	66.0	くらわんか碗	染付	「大明年製」銘
10	磁器	肥前	碗	(100.0)	41.0	54.0	くらわんか碗	染付	不明字銘
11	磁器	肥前	碗	(92.0)	(34.0)	51.0	くらわんか碗	染付	不明字銘
12	磁器	肥前	碗	(95.0)	(32.0)	53.0	くらわんか碗	染付	不明字銘
13	磁器	肥前	碗	(96.0)	(39.0)	50.0	くらわんか碗	染付	不明字銘
14	磁器	肥前	碗	(98.0)	39.0	56.0	くらわんか碗	染付	不明字銘
15	磁器	肥前	碗	(110.0)	41.0	51.0	くらわんか碗	染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
16	磁器	肥前	碗	-	40.0	>57.0	くらわんか碗	青磁染付	不明字銘
17	磁器	肥前	碗	-	41.0	>36.0	くらわんか碗	染付	渦福
18	磁器	肥前	碗	(71.0)	(33.5)	57.0	筒形碗	染付	
19	磁器	肥前	碗	(67.0)	(32.0)	>53.5	筒形碗	染付	
20	磁器	肥前	碗	-	36.0	>11.0	筒形碗	染付	
21	磁器	肥前	碗	(73.5)	-	>44.5	筒形碗	染付	
22	磁器	肥前	碗	(78.0)	-	49.5	小丸碗	染付	
23	磁器	肥前	碗	-	33.0	>49.0	小丸碗	染付	
24	磁器	肥前	碗	-	53.0	>51.0	広東碗	染付	
25	磁器	肥前	碗	(107.0)	(40.0)	>55.5	端反碗	染付	
26	磁器	瀬戸・美濃	碗	(100.0)	(40.0)	56.0	端反碗	染付	
27	磁器	瀬戸・美濃	碗	(88.9)	(38.0)	44.0	端反碗	染付	
28	磁器	瀬戸・美濃	碗	(92.0)	(34.0)	46.5	端反碗	染付	
29	磁器	瀬戸・美濃	碗	(103.0)	(42.0)	57.0	端反碗	染付	
30	磁器	肥前	碗	-	35.0	>30.0		外面褐釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
31	磁器	肥前	碗	(66.0)	(31.0)	>52.0	湯呑碗	染付	
32	磁器	瀬戸・美濃	碗	-	34.0	>31.0	湯呑碗	染付	
33	磁器	肥前	坏	(70.0)	(28.0)	26.0		染付	紅皿として利用?
34	磁器	肥前	坏	61.5	22.0	28.0		染付	紅皿として利用?
35	磁器	肥前	坏	(41.0)	14.0	13.5		染付	紅皿として利用?
36	磁器	肥前	坏	(59.0)	(24.0)	20.0		白磁	紅皿として利用?

第 5 表 磁器観察表（2）

遺物 №	胎質	推定 生産地	器種	法 量(mm)			慣用名	釉 薬	備 考
				口径	底径	器高			
37	磁器	肥前	坏	(63.0)	29.0	35.5		染付	
38	磁器	瀬戸・美濃	坏	>62.0	28.0	32.0		染付	関西系?、角杵銘
39	磁器	中国	坏	-	18.5	>28.0		青花	高台無釉、景德鎮窯
40	磁器	肥前	坏	(70.0)	(20.0)	35.0		染付	
41	磁器	肥前	猪口	(51.0)	(30.0)	41.0		染付	
42	磁器	肥前	皿	137.0	46.5	38.0		染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
43	磁器	肥前	皿	120.5	40.0	40.0		染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
44	磁器	肥前	皿	(129.0)	(66.0)	38.0		染付	不明字銘
45	磁器	肥前	皿	(132.5)	(77.0)	40.5		染付	不明字銘
46	磁器	肥前	皿	-	(80.0)	>26.0		白磁	蛇ノ目高形高台
47	磁器	肥前	鉢(碗か)	(122.0)	46.0	58.0		染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
48	磁器	肥前	鉢(碗か)	(124.0)	41.0	45.0		染付	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
49	磁器	肥前	鉢(碗か)	-	40.0	>41.0		染付	
50	磁器	肥前	鉢	(110.0)	(53.0)	47.5	八角鉢	染付	
51	磁器	肥前	鉢	-	(88.0)	>35.0	八角鉢	染付	蛇ノ目高形高台
52	磁器	肥前	香炉	-	40.0	>29.5		青磁	
53	磁器	肥前	香炉	(78.0)	-	44.0		青磁	
54	磁器	肥前	仏飯器	(66.5)	37.0	55.0		染付	
55	磁器	肥前	瓶	-	37.0	>77.0	御神酒徳利	瑠璃釉	
56	磁器	肥前	瓶	-	-	>78.0	御神酒徳利	染付	
57	磁器	肥前	瓶	-	-	>55.0	御神酒徳利	染付	胴部に「五口」の染付
58	磁器	肥前	戸車	13.0	19.0	55.0		白磁	
59	磁器	肥前	水注	(62.0)	(48.0)	56.0	銚子	染付	
60	磁器	肥前	碗(蓋)	-	(33.0)	>19.0	広東碗	染付	角杵銘
61	磁器	肥前	碗(蓋)	(103.0)	57.0	29.5		青磁染付	渦福
62	磁器	肥前	碗(蓋)	(83.0)	(38.5)	23.5	端反碗	染付	
63	磁器	肥前	合子(蓋)	50.0		12.0		染付	
64	磁器	中国	碗	-	33.0	>15.5		青花	高台無釉
65	磁器	中国	大皿	-	(132.0)	>17.0	スフトウ	青花	贗窯
66	磁器	中国	皿	-	(110.0)	>18.0		青花	景德鎮窯

近世陶磁器の様相

表採資料の過半は、近世陶磁器であった。このうち磁器が943個体で、陶器の423個体（蓋を除くと392個体）と比較すると約7割が磁器製品が占めている。まず、当該資料の内容を検討するにあたり年代的把握を行いたい、編年研究の進行している磁器碗・皿をメルクマールに位置づけたい。第10図は、年代の指標になる碗・皿の小器種である。分類のキャプションは、東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）（以下「東大分類」と略す）とシンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ（以下「シンボ分類」と略す）で提示した分類コードである。詳細は上記文献を参照されたい。

年代的考察

資料全体の年代は、いわゆる「明末清初」と称される17世紀前半の中国製品から（64～66）、ここでは図示していないが、近代以降の陶磁器まで確認されていることから、近世以降年代的には断絶なく遺物が確認されている。

第6表は、年代的指標に使った碗・皿の小器種の数量を示したものである。これらの小器種は、江戸遺跡における消費状況からおおむね表のような年代観が与えられる（堀内 2000）。初現年代で集計を行うと以下の通りである。

・碗	17 世紀	72 個体	・皿	17 世紀	38 個体
	18 世紀	519 個体		18 世紀	82 個体
	19 世紀	53 個体		19 世紀	7 個体

これらから表採された製品は 17 世紀から 19 世紀にわたるものの、18 世紀の製品が多いことが判る。細かく見てみたい。17 世紀に分類した製品は、碗では初期伊万里（1、2）、いわゆる藍九谷といわれる高台断面が三角に成形された製品（3）、薄手半球碗（4）、いわゆる藍柿右衛門段階とそれに続く高台「U」字状に成形した製品（6～9）などである。このうち、薄手半球碗と U 字状高台碗は、18 世紀以降に年代的中心を有し、ここに分類された製品の多くは 18 世紀以降に比定される。皿についても同様で、高台無釉の蛇ノ目釉ハギ製品といわれる藍柿右衛門段階以降の高台「U」字状に成形した製品も 18 世紀以降の製品が主体を占めている。したがって、18 世紀の製品の割合はさらに上がる可能性が高い。

18 世紀に分類されたものは、いわゆるくらわんかと称される碗（10～17）をはじめ、多くは下手の製品で構成される。これらは 18 世紀前半から 19 世紀に入るような生産年代が想定されているが（中野 2000）、器高の低い梅樹文碗（10、13）、蛇ノ目釉剥ぎ碗（15、48）、青磁染付碗（16）、厚手の皿（45）など多くは 18 世紀中葉から後半にかけての製品であろうと考えられる。この他、筒形碗（18～20）、小丸碗（22、23）、望料碗（高台が「ハ」の字に開く碗）、朝顔形碗、蛇ノ目釉剥ぎ皿（42、43）など 18 世紀中～後半を中心とした製品が主体的に確認されている。

19 世紀に分類された製品は、18 世紀末頃からみられる広東碗（24、61）や蛇ノ目凹形高台の高台高の低いタイプなどは、確認できるものの量は減少する。また、幕末期に比定される型皿や木型打込製品などは極めて少ない。

上記磁器の状況を踏まえ、陶器を一瞥したい。磁器で多く出土している 18 世紀中～後葉の陶器製品は、瀬戸・美濃系の灰釉丸碗、せんじ碗（3）、摺り絵皿（9）、輪禿皿（6）などで、陶器も多く確認されている。他方、多く出土している製品に肥前の呉器手、京焼風陶器、刷毛目、内野山の銅緑釉の製品がある。これらは合わせて 107 個体が確認されているが、これらはいずれも 17 世紀末～18 世紀前葉にかけての製品である。当該期の磁器製品が確認されていないにもかかわらず、陶器が一定量確認できる状況は興味深い、これについては後述する。

これらの分析から本資料は、17 世紀から近代にかけて出土しているものの、17 世紀末～18 世紀後半に年代的中心があると判断できる。

胎質・器種組成

本資料は興津海岸に散布していた表採品であるが、第 1 章にもあるようにギルフォイル氏が約 20 年間にわたって蒐集したものである。資料は陶器、磁器の他に石製品、瓦、土器、ガラスなど胎質のみならず器種、年代、生産地など広範にわたっており、発掘調査によって原位置などを記録したものではないが、ある程度散布地の組成を反映している可能性がある。

確認できた器種は、碗、皿、坏、鉢、仏飯器、香炉、そば猪口、瓶・德利、蓋物、水滴、紅皿、灯明皿、灯明受皿、ひょうそく、播鉢、壺、片口鉢・捏鉢、火入れ、植木鉢である。量が多い順に碗（743 個体）、皿（217 個体）、坏（104 個体）、仏飯器（65 個体）、鉢（54 個体）、瓶・德利（52 個体）、灯明具（42



第10図 年代指標

第6表 磁器器種組成表

胎質	推定生産地	器種	小器種	個体数	推定年代
磁器	肥前	碗	初期伊万里	13	17前
			高台三角形	3	17後
			高台U字状	26	17末～
			薄手半球碗	30	17末～
			厚手・くらわんか	266	18前～後
			(コンニャク印判)	22	
			(網目文)	73	
			(見込み蛇ノ目釉刺ぎ)	47	
			(青磁染付)	3	
			朝顔形碗	2	18後
			筒形碗	74	18後
			小丸碗	23	18後
			望料碗	1	18後
			広東碗	8	18末～19前
			端反碗	22	19前～中
			湯呑碗	4	19前～中
		碗計	617		
		皿	初期伊万里	2	17前
			高台三角形	1	17後
			高台U字状	13	17末～
			蛇ノ目釉刺ぎ(高台無釉)	22	17後～18前
			蛇ノ目釉刺ぎ(底径小)	33	18中
			蛇ノ目釉刺ぎ(底径大)	7	18中
			厚手	35	18前～後
			蛇ノ目凹形高台(低)	7	18後～19初
			蛇ノ目凹形高台(高)	5	19前～中
			その他・不明	1	
		皿計	126		
		坏	45		
		香炉	9		
		鉢	12		
		猪口	8		
		瓶	31		
		蓋物	1		
		仏飯器	57		
		水滴	4		
		紅皿	2		
		肥前計	912		
	瀬戸・美濃	碗	27	19前～中	
		皿	蛇ノ目凹形高台	2	19中
		瓶	2		
	瀬戸・美濃計			31	
磁器合計				943	

個体)、播鉢(20個体)、香炉(19個体)となっている(第2表)。第7表下段は、農村遺跡と江戸遺跡における18世紀後半の遺構一括出土資料の器種組成である。農村遺跡は、興津よりはやや北に位置するが千葉県東金市前畑遺跡6地区の18世紀後半を中心に17世紀～19世紀までの遺物が出土した資料、群馬県佐波郡玉村町上福島遺跡の1783年浅間山の噴火によって泥流に埋もれた11棟の農家から出土した資料、江戸遺跡は、巣鴨遺跡(藤和シティホームズ巣鴨地区)67号遺構(以下「巣鴨67」と略す)、同遺跡93号遺構(以下「巣鴨93」と略す)が町屋、東京大学本郷構内の遺跡農学部共同溝地点SU1(以下「東大SU1」と略す)が組屋敷、同遺跡医学部附属病院外来診療棟地点SK152(以下「東大152」と略す)、同遺跡医学部附属病院設備管理等地点Y34-4(以下「東大Y34-4」と略す)が大名屋敷(大聖寺藩邸)を比較資料として呈示した。なお、数量は前畑遺跡が点数、その他は個体数である。

生活遺跡の状況を説明したい。胎質組成はいずれも磁器よりも陶器が多く出土しており、磁器の割合は、上福島遺跡では約3割とやや低いものの、前畑遺跡や江戸遺跡では4割程度とおおむね共通している。全ての遺構で最も多い器種は碗であり、その割合も上福島遺跡では約半数と高いが、前畑遺跡や江戸遺跡では33～42%と全体の1/3強とこれも概ね共通している。次に出土量の多い器種は瓶・徳利であるが、前畑遺跡や上福島遺跡より江戸遺跡のが比率が高く、江戸特有の「通い徳利」の量が反映していると考えられる。これら江戸遺跡の状況は、主体的な器種の比率に着目するならば、町地、組屋敷、大名屋敷などの階層の違いがあまり認められないことを意味しており、都市における基本的な生活様式に共通性が存在すると判断できる。

次に興津海岸表採資料と対比してみたい。一見して磁器が陶器を大きく凌駕していることが看取される。すなわち表採資料では磁器が全体の70%を占めているのに対し、先述のように農村遺跡や江戸遺跡では階層によらず陶器が多い。また、農村遺跡や江戸遺跡では客体的であった仏飯器の割合が大きいこと、その他として分類した器種の量が少ないことが挙げられる。その他に入れた器種には、江戸遺跡ではそば猪口、油壺、壺、甕、水滴、合子、片口鉢、灰落とし、鬚水入れなどが、農村遺跡では水滴、水注、壺、甕、鬚水入れ、そば猪口、片口鉢などが出土しており、表採資料には生活遺跡で一定量出土する貯蔵具、化粧道具、喫煙具、文房具など飲食器以外の道具類の割合が非常に少なく、これらと全く異なる組成ではないではないものの、日常生活に必要な器種が欠けているなど異なっている点も指摘できる。

第7表 胎質組成、器種組成

	磁器	陶器	合計	碗	皿	坏	仏飯器	鉢	瓶・徳利	灯明具	播鉢	香炉	その他	年代	土地利用
興津海岸	943	392	1335	743	217	104	65	54	52	42	20	19	19		
上福島中町	58	133	191	89	20	2	4	4	18	21	3	11	20	1783年	農村
前畑遺跡	166	208	374	125	80	20	11	14	10	17	62	16	19	17～19c	農村
巣鴨町67	70	87	157	63	19	6	2	1	31	7	2	2	24	1770年代	町地
巣鴨町93	118	189	307	122	30	14	8	6	40	14	4	6	63	1770年代	町地
東大SU1	65	84	149	52	19	9	4	8	17	8	3	7	22	1772年	組屋敷?
東大SK152	206	370	576	197	69	18	2	20	91	15	15	11	138	1750年代	大名屋敷(大聖寺藩)
東大Y34-4	110	134	244	104	34	7	2	16	5	—	6	7	63	1770年代	大名屋敷(大聖寺藩)
江戸合計	569	864	1433	538	171	54	18	51	184	44	30	33	310		

※東大Y34-4の瓶・徳利の数量は、瀬戸・美濃系、志戸呂系の製品が未カウントとなっている
※東大Y34-4の灯明具は未カウントとなっている
※数字は前畑遺跡は点数、その他は個体数

産地組成

産地組成は、磁器では肥前 912 個体（磁器の 97%）、瀬戸・美濃 31 個体（3%）、陶器では瀬戸・美濃 252 個体（64%）、肥前 120 個体（31%）、明石・堺 9 個体（2%）、丹波 7 個体（2%）、志戸呂 2 個体、京都と備前が 1 個体、その他常滑の小片が確認されている。

資料自体に肥前磁器が多く占めていることから総計では肥前の割合が大きくなっている（1,032 個体、77%）。ただし、細かく観察すると資料が増加する 17 世紀末～18 世紀前葉では、肥前の大川内の呉器手碗や京焼風陶器碗、現川などの刷毛目碗、内野山の銅緑釉皿などはほぼ当該時期の陶器製品で、これらが瀬戸・美濃陶器や肥前磁器より多くを占めている。これに対して 18 世紀中葉～後葉ではくらわんかの網目文や蛇ノ目釉剥ぎ碗、筒形碗、斜格子文の蛇ノ目釉剥ぎ皿などには特定の文様を施された磁器製品がまとまって確認されており、年代によって差異があることを注意したい。この状況を年代、器種組成と合わせて考えてみると生活遺跡と大きな差異が確認された胎質・器種などは、18 世紀中葉～後葉段階であることが指摘される。比率は別として基本的な産地構成は、前畑遺跡、上福島中町遺跡、江戸遺跡と大異なく、関東的といえるだろう。

分析結果と資料の評価

これまで表採資料について年代、器種、生産地組成について分布状況を明らかにしたが、この分析によって看取された特徴を再確認してみたい。

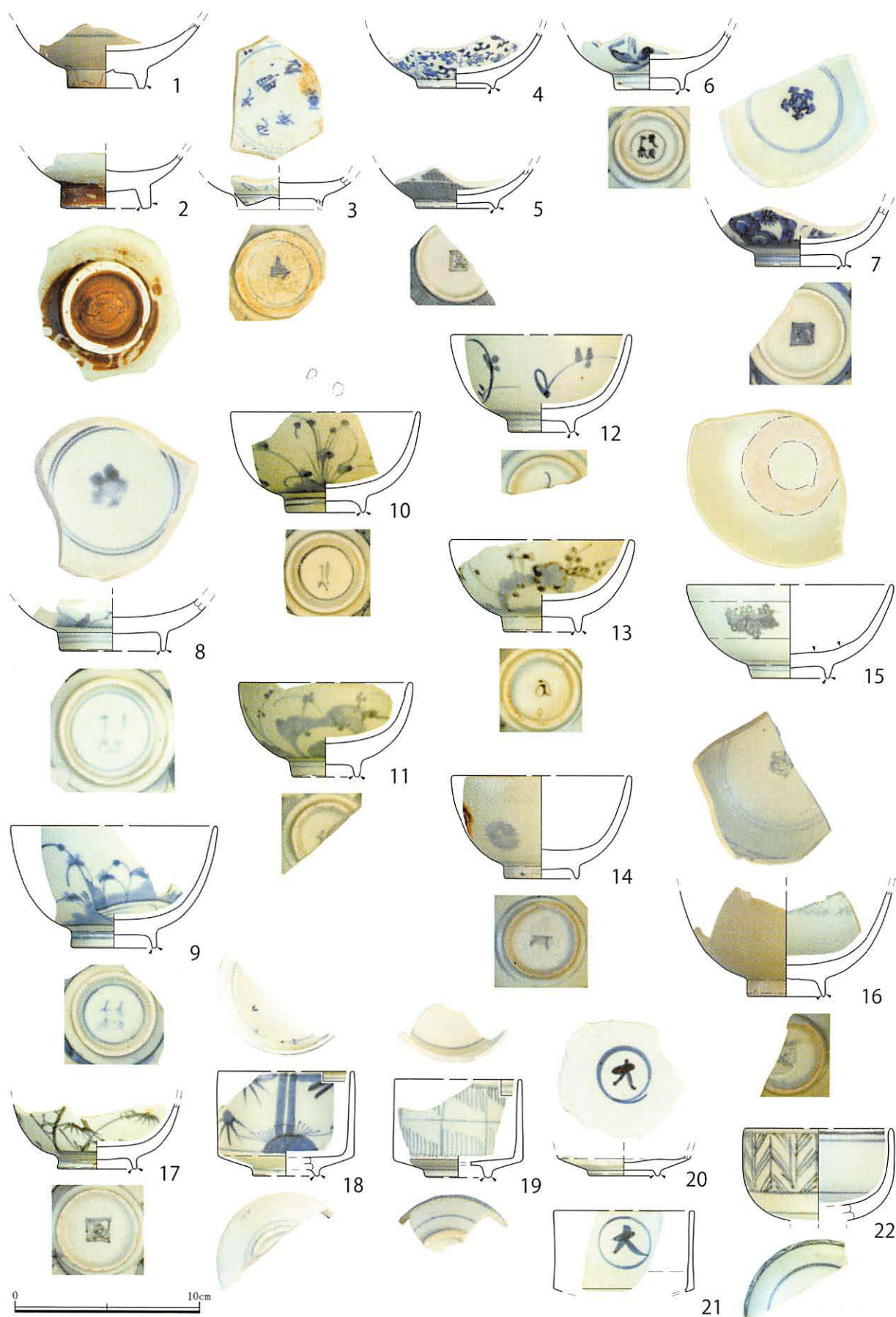
- ①江戸時代を通して確認されるが、その年代的中心は 17 世紀末～18 世紀後半である。
- ②特定の胎質（磁器）、器種（碗、仏飯器）に偏在する傾向が、18 世紀中葉～後葉にかけて伺える。
- ③器種組成は生活遺跡と大きく異なることはないものの、生活遺跡では一定量出土する貯蔵具、化粧道具、喫煙具、文房具など飲食器以外の道具類が少ない。
- ④産地組成は、関東的である。

以上のような特徴が認められたが、その原因について考えてみたい。確認された資料の増加は、17 世紀末以降に人的活動が活発化したとも考えられるが、一方で、集落は資料が少なくなる 18 世紀後半以降現在まで継続して経営されており、資料数の増減の要因を別に考える必要がある。一方で、海岸に多量に遺存していた原因について、継続的な海への投棄、潮の状況、商船の海難など種々の状況が想定できる。

勝浦市史によると興津港は、川村瑞軒によって寛文 11（1670）年に開かれたいわゆる東廻り海路の避難港として設定され、仙台石で作られた繋船柱の存在など特に仙台藩との関係が指摘されている。また、勝浦沖は「鬼が島」と呼ばれる海上の難所で、事故が多発したことなどが記されており、当該資料の 17 世紀末以降の増加や 18 世紀中葉～後葉では特定の胎質、器種、製品への偏在などは、商船の海難による積荷の投棄、沈没などが想定される。あるいは 17 世紀末～18 世紀前葉は生活セットに近い形で組成が復元されたことも事実で、元禄 16（1703）年の大地震による津波で外房地域に数千人の死者を出す惨事になったが、こうした自然災害も生活財流出の原因となった可能性があるだろう。

他方、量的には多くはないものの墨書資料なども確認されており、廃棄された流通商品以外の消費段階の生活品も含まれていることも事実で、この資料は生活品、流通商品などが混在したものと考えることができよう。

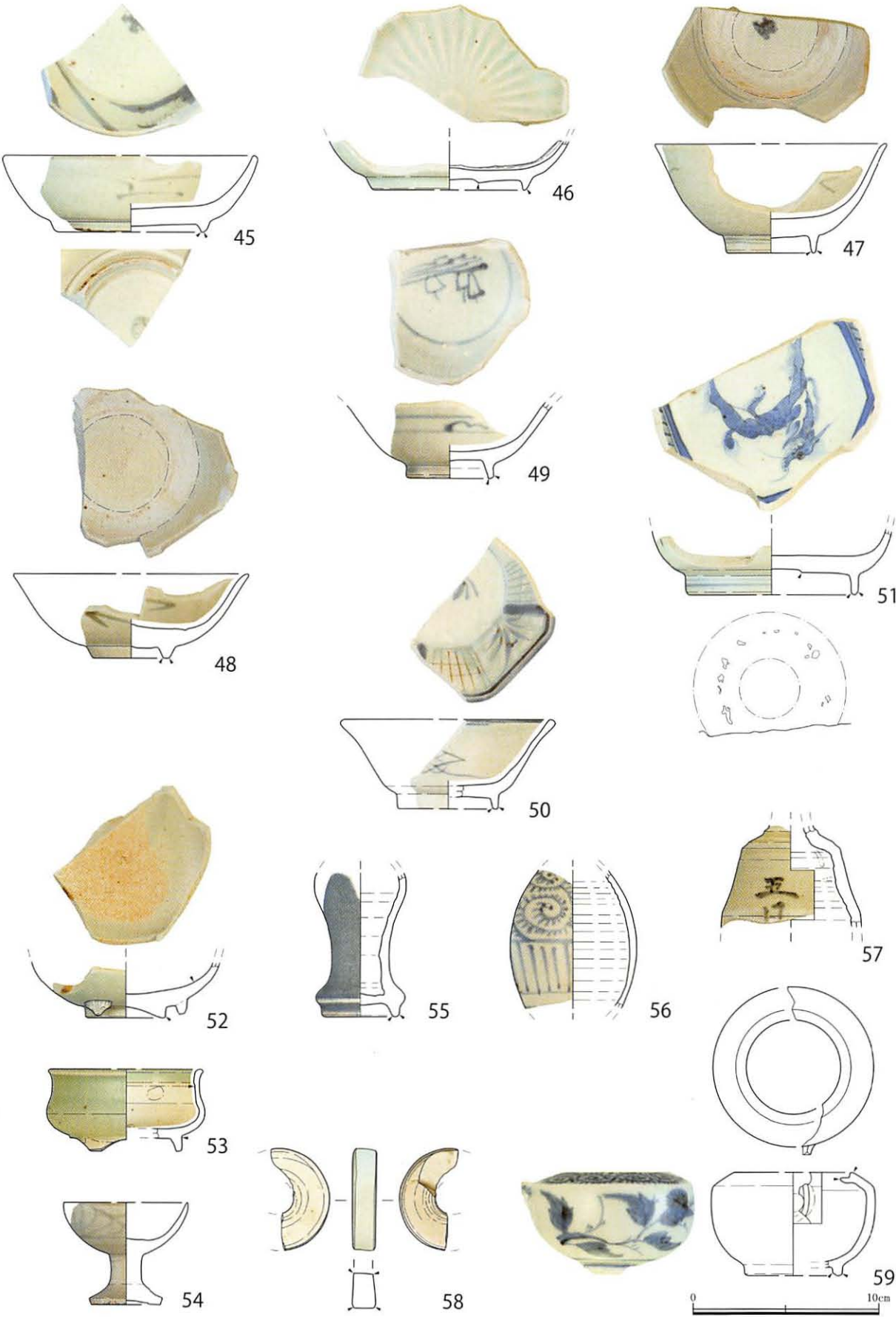
これまでの分析によって一定の成果が得られたと考えているが、本資料は表採資料であり、ギルフォイル氏の胎質、器種、産地などに対する意識とは別に遺物の色調による発見の偏差なども考えられ、注意する必要があることも付け加えておきたい。（堀内）



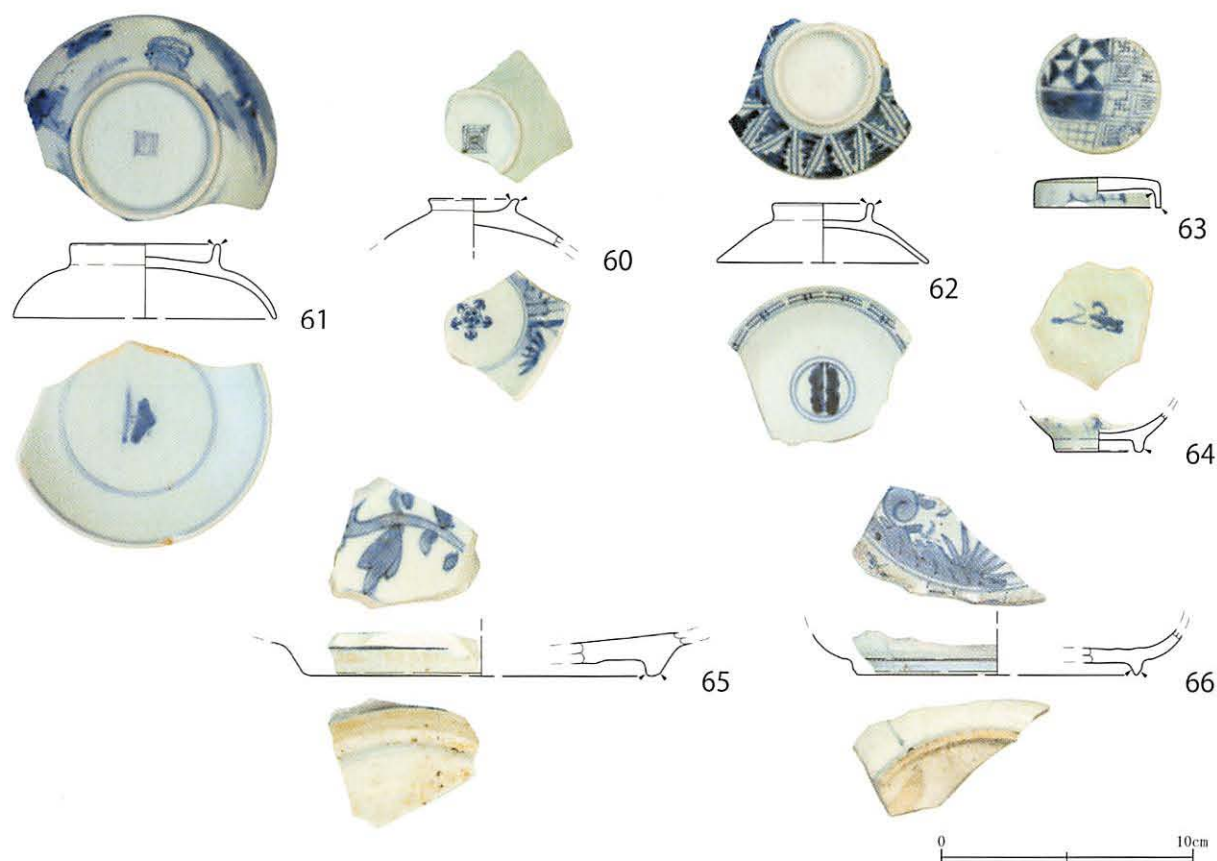
第11図 磁器 (1)



第 12 図 磁器 (2)



第 13 図 磁器 (3)



第 14 図 磁器 (4)

第 3 節 貿易陶磁器 (写真 4・5)

1. 中国陶磁

中国青花磁器は、16～19 世紀の製品が実測図で掲載したものを含めて 20 点程度確認されている。いわゆる明末清初と位置づけられる製品が多い。

写真 4 上段は明末福建・広東諸窯の碗である。左は漳州窯の碗で、1613 年に沈没したオランダ貿易船ヴィッテレウ号に積載されていた製品である。16 世紀末～17 世紀前半の製品であると考えられる。中央は、福建・広東諸窯の碗で 17 世紀前半、右は景德鎮窯の碗で 16 世紀前半の製品である。中段左、中央は景德鎮窯の皿で、17 世紀前半の製品であろう。中段右は、景德鎮窯の坏で 17 世紀前半に位置づけられる。下段左は高台無釉の皿で景德鎮窯 17 世紀前半、中央は福建・広東諸窯の碗で 17 世紀前半、右は景德鎮窯の碗で 17 世紀前半の製品であろう。

2. ヨーロッパ硬質陶器

写真 5 は 19 世紀のヨーロッパ硬質陶器である。プリントで描画されていることから、プリントウエア、あるいはアースンウエア、インダスタルウエアなどと称されている製品である。プリントウエアは、イギリス中部のスタッフォードシャーで安価なティーウエアの需要から 18 世紀後半に開発された。日本へはヨーロッパの窓であったオランダのマーストリヒト地方のペトゥルス・レギー窯の製品が多く輸入されている。

出土しているプリントウエアは、イギリスあるいはオランダの 19 世紀の製品と考えられる。上段左は皿、他はカップである。上段右は「ウイローパターン」のカップである。

(堀内)

第 4 節 土製品（第 15 図、第 8・9 表、写真 12・18）

採取された点数は、鍾 145 点（完形 86 点・破片 59 点）とエビ型土製品 9 点（完形&略完形 4 点・破片 5 点）を数える。前者は漁労具としての使用目的、後者は民俗事例から「どんと焼き」での使用が見られる。

第 8 表 土鍾分類表

分 類	個 数
A-1	8
A-2	12
A-3	46
A-4	9
A-5	1
A-6	5
A-7	1
B-1	3
B-2	1

1. 鍾

鍾は大きく素焼きの土器と陶器に 2 区分し、大きさや形状等から更に 9 分類した。分類した代表的なもの計 18 点を図示した。

分類は以下の通りである。

- A 土鍾

1 長さ 3.5 cm以下で管状を呈する。

2 長さ 5.0 cm以上で管状を呈する。

3 長さ 4.0 ～ 5.0 cm未満で管状を呈する。

4 長さ 5.0 cm以上で管状を呈する。
- 5 長さ 6.0 cm以上で管状を呈する。

6 溝を有し、断面扁平状を呈する。

7 溝を有し、断面円形状を呈する。
- B 陶鍾

1 長さ 5.0 cm以下で管状を呈する。

2 長さ 3.5 ～ 4.0 cm未満で管状を呈する。

規格・形状について

完形品と略完形品 86 点を対象に分類を行なった。

結果的に、A-3 類が突出していることが理解できた（第 8 表）。しかし A-4 類としたものでも、多くは境界とした長軸 5.0 cmを 1 ～ 2 mm上回る程度である。つまり、主体は長軸 5 cm・重量 20 g 前後のものが規格サイズであることが言える。

形状としては、管状と有溝のものに二分される。管状土鍾は所謂、紡錘形を基本とするが、A-1・2 類は長さが短くなる分、体部に丸みを有する。

穿孔部の径は 1.0 ～ 1.5 mmの範疇であり、使用する網の径がこの数値範囲内であった事が想定される。成形には面取りが、陶鍾の大半で観察されたが、土鍾では 6 だけである。陶鍾の多くは破片で、図示できなかったが、土鍾に比べ、長軸 5.0 cm・幅 4.0 cm以上・穿孔部の径 3.0 cm以上と大型化する傾向が窺える。重量もこれに比例して増す。

2. 土製品

完形・略完形品 4 点のうち、2 点を掲載した。

図示した 2 点のうち、20 は尻尾部分を欠損するが、いずれも長さ 10 cm前後を測る。他 2 点は、長さ 5 cmのものと尻尾を欠損するが推定長 8 cmのものである。つまり計測値上では、規格は一律ではないことが伺える。また尻尾部分のみ残存するものが 5 点みられ、20 や他類例などから、反り返りを有する尻尾周辺部は欠損しやすいことが理解できる。

頭部には径 1 mm程の孔が数ヶ所設けられている。完形品（写真 18）を見ると、ヒゲを表

第 9 表 土製品計測一覧表

遺物 No.	種別	法 量(mm)		重量 (g)	遺存率 (%)	分類	形状等	その他
		長さ	幅					
1	土鍾	34	20	10	100	A-1	管状	
2	"	32	21	11	100	"	"	
3	"	38	26	17	100	A-2	"	
4	"	40	26	22	100	"	"	
5	"	43	26	21	100	A-3	"	
6	"	44	30	47	100	"	"	面取り
7	"	48	34	50	100	"	"	
8	"	50	22	18	100	"	"	
9	"	50	22	19	100	"	"	
10	"	50	24	20	100	"	"	
11	"	50	24	21	100	"	"	
12	"	51	24	23	100	A-4	"	
13	"	64	30	46	100	A-5	"	
14	"	50	30	21	100	A-6	有溝	
15	"	47	32	40	100	A-7	"	
16	陶鍾	45	30	37	100	B-1	管状	面取り
17	"	54	>44	51	50	B-2	"	"
18	"	75	>44	75	50	"	"	"
19	土製品	95	28	36	100	-	陶エビ	
20	"	>80	34	31	80	-	陶エビ	尻尾部欠損

現するものが付随されており、そのための孔であることが推測される。

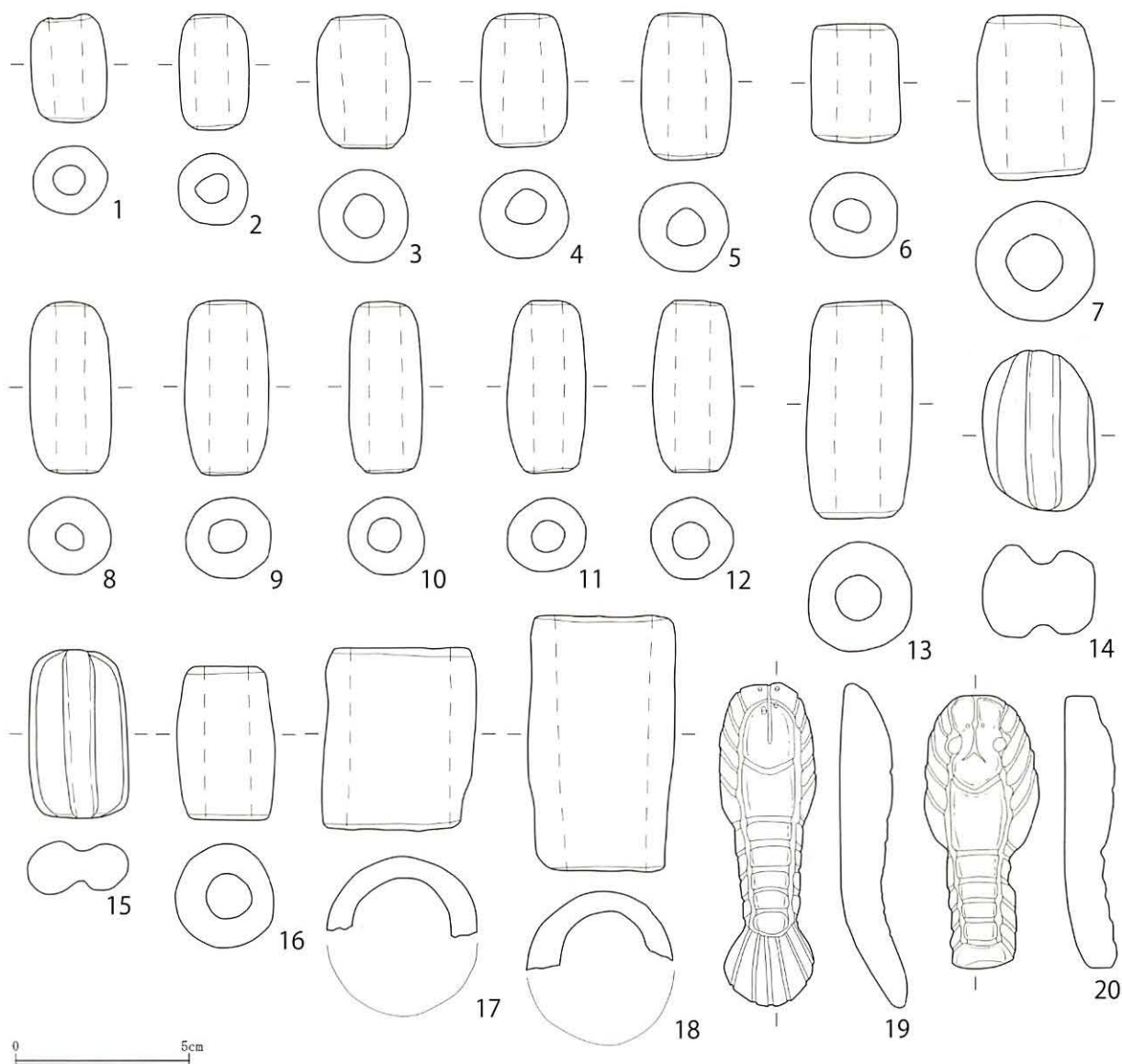
さて、これらは民俗事例や他類例の参照から、正月用飾りを焼く「どんと焼き」で使用されたものである。お目出度いとされる伊勢（鎌倉）エビであるため、正月飾りに使われ、長生きするように、また家が繁栄するようにと正月飾りに使われた訳である。

周知のように「どんと焼き」は裸火が用いられるため、煤などで丸焦げになっている類例も見られている。しかし、今回の資料はいずれも全体的に摩滅していたため、そのような痕跡は見られなかった。海浜で採取されたことから、海辺で正月行事が行われていた風景が想像できよう。

(小宮山)



18. 鎌倉エビ



第15図 土製品

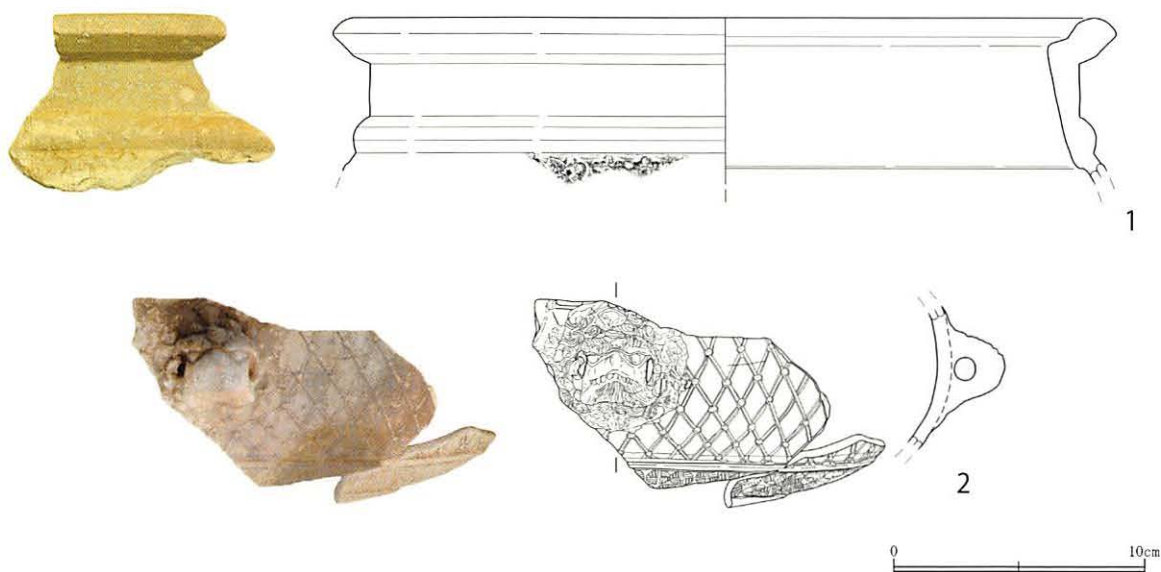
第5節 土器火鉢（第16～18図）

土器火鉢は総破片点数 305 点、総重量 4,585 g を数える。その内 10 点を第 16・17 図に図示した。火鉢の材質はやや硬質の素焼きの土器で、胎土色はやや黄色味を帯びた灰白色を呈するものと褐灰色を呈するものの二種に分けられる。灰白色は酸化炎焼成、褐灰色は還元炎焼成であると考えられる。両者の器形や文様の特徴に差は見られない。器形は獅子頭形把手の瓶掛形火鉢と推測される。製作地と製作年代は不明であるが、少なくとも江戸時代には遡らないと考えられる。

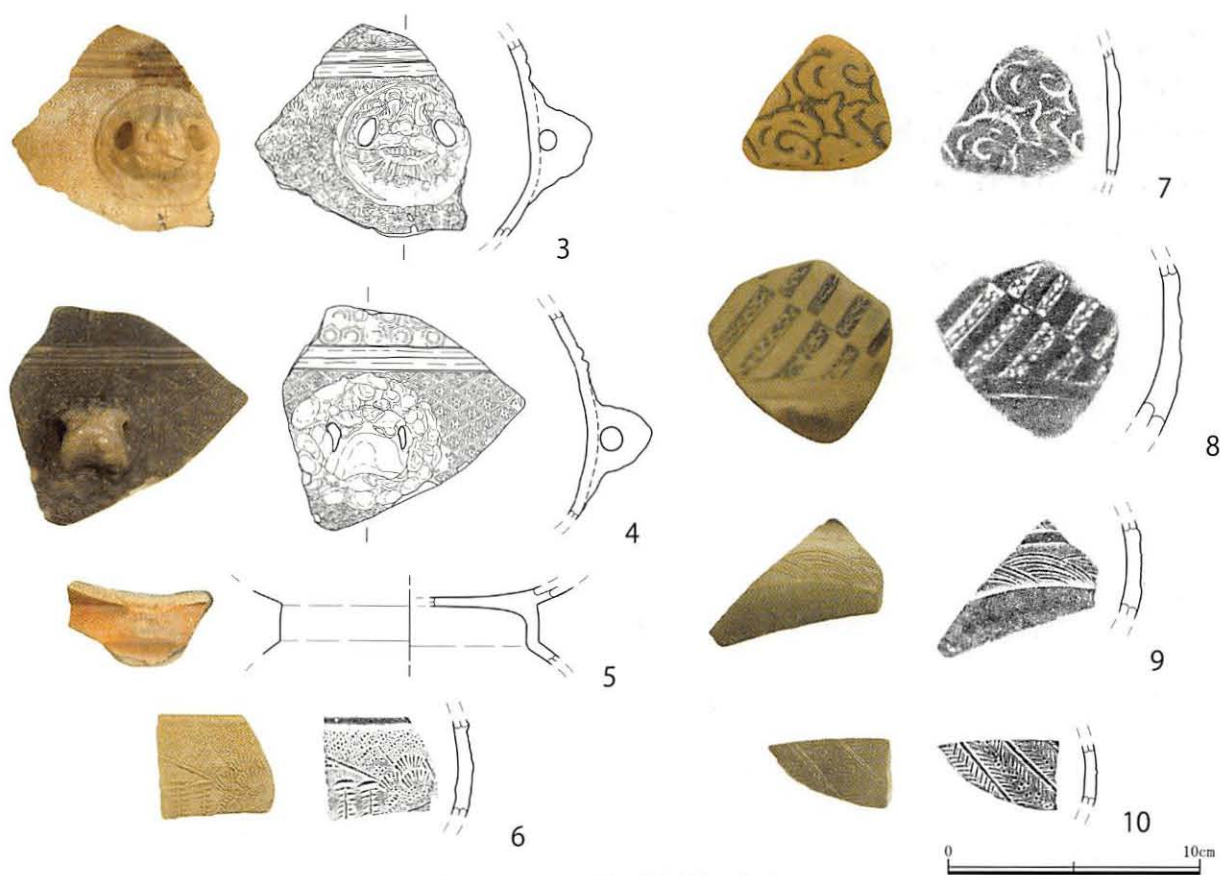
1 は口縁部である。胎土色は灰白色である。口縁は折縁形で頸部下に 1 本の隆帯を持つ。胴部に花文が陽刻される。2 は胴部である。胎土色は灰白色である。穿孔を有する獅子頭形把手が貼付され、胴下部に 1 本の隆帯をもつ。胴中央部に網目文、胴下部に丸形の網代文が陽刻される。3 は胴部である。胎土色は灰白色である。2 と同様、穿孔を有する獅子頭形把手が貼付され、胴上部に二本の隆帯を持つ。菊花文が型押陽刻される。4 は胴部である。胎土色は褐灰色である。2・3 と同様、穿孔を有する獅子頭形把手が貼付され、胴上部に二本の隆帯を持つ。胴上部に亀甲文、胴中央部に菱文が型押陽刻される。5 は底部である。胎土色は灰白色である。高台断面形がハの字形に開いている。6 は胴部である。胎土色は灰白色である。霞地に植物文が陽刻される。7 は胴部である。胎土色は乳褐色である。雲文が陰刻される。8 は胴部である。胎土色は灰褐黄色である。同じ大きさと形の文様と地が交互に入れ替わる入替文という文様構成である。9 は胴部である。胎土色は褐灰色である。1 本の隆帯の下に波文が陽刻される。10 は胴部である。胎土色は褐灰色である。植物文が陽刻される。

ここで取り上げた土器火鉢は、全てが破片資料で器形を観察できるものが少なかったが、文様は様々の種類のものが見られたので、代表的なものを第 18 図に掲載した。文様帯は 1 本又は 2 本の隆帯を境に胴上部・胴中央部・胴下部の三つの区画から構成される。胴中央部は区画が広く、胴上部と胴下部は帯状の狭い区画である。各文様は近世以降広く一般的に使用されたものばかりで、連続文様が多い。割合としては亀甲文と菊花文が最も多く見られた。文様構成に主副関係はあまりなく殆どの文様が地文的扱いであるが、その中で見られる傾向としては、やや複雑な植物文様は胴中央部に配置され、亀甲文は胴上部か胴下部の区帯に配置されるものが多いようである。

(原)



第16図 土器（火鉢）（1）



第 17 図 土器（火鉢）（2）



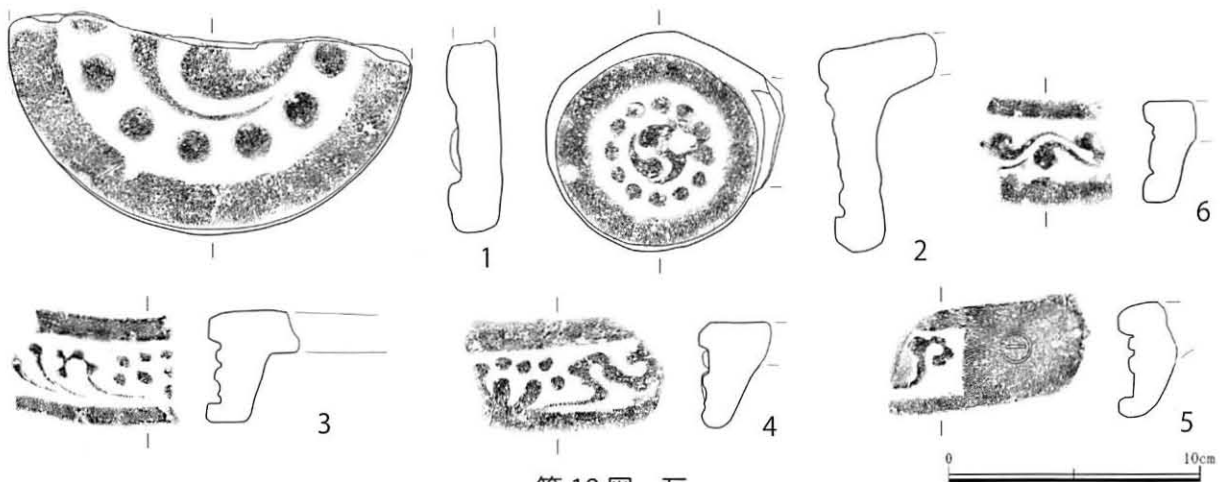
第 18 図 土器（火鉢文様）

第6節 瓦（第19図、第10表、写真11）

表採した瓦は合計 248 点を数え、いずれも破片であった。全体に著しく摩滅していることに加え、平瓦と棧瓦は小破片では判別が難しいことから、種別を特定できるものは少なかった。その内訳は軒丸瓦 6 点、軒棧瓦 23 点、丸瓦 5 点、棧瓦 5 点、不明 209 点（軒平瓦または軒棧瓦軒平部 17 点、平瓦または棧瓦 155 点、5 cm 以下の小破片 37 点）である。

軒瓦は計 46 点見られ、瓦当文様は軒丸瓦は連珠右三巴文、軒平瓦・軒棧瓦軒平部は均整唐草文、軒丸部は右三巴・連珠左三巴・連珠右三巴文が認められた。製作地別では、東海地域（尾張・三河地方など）を中心に生産されたいわゆる「東海式」41 点、江戸及びその近郊を中心に生産されたいわゆる「江戸式」5 点で、「東海式」が約 90% を占めていた。遺存状態が不良のため、製作年代を推定するのは困難だが、概ね 18 世紀後半以降のものと思われる。

この中で比較的残存状態が良好な瓦 6 点を以下に図示する。 (土本)



第19図 瓦

第10表 瓦観察表

遺物No.	材 質	種 別	法 量(mm)	重量(g)	備 考
1	瓦	軒丸瓦	長さ：>21 幅：>159 厚さ：- 高さ：>89 瓦当外径：(160) 瓦当内径：(120) 瓦当厚：20	335	瓦当：連珠右三巴文 胎土：暗灰色 二次焼成：なし 東海式
2	瓦	軒棧瓦	長さ：>47 幅：>94 厚さ：20 [軒丸部]瓦当外径：80 瓦当内径：54 瓦当厚：20	237	軒丸部瓦当：連珠左三巴文 胎土：灰色 二次焼成：なし 東海式
3	瓦	軒平・ 軒棧瓦	長さ：>67 幅：>61 厚さ：17 [軒平部]瓦当幅：>61 瓦当高：44 瓦当厚：18 文様区画幅：>61 文様区画高：26	169	瓦当：均整唐草文 胎土：灰白色 二次焼成：なし 東海式
4	瓦	軒平・ 軒棧瓦	長さ：>28 幅：>74 厚さ：17 [軒平部]瓦当幅：>74 瓦当高：42 瓦当厚：12 文様区画幅：>74 文様区画高：25	85	瓦当：均整唐草文 胎土：暗灰色 二次焼成：なし 東海式
5	瓦	軒平・ 軒棧瓦	長さ：>36 幅：>87 厚さ：- [軒平部]瓦当幅：>87 瓦当高：43 瓦当厚：16 文様区画幅：>29 文様区画高：27	111	瓦当：均整唐草文 胎土：灰白色 二次焼成：なし 東海式 瓦当右周縁に刻印「〇に一」
6	瓦	軒平・ 軒棧瓦	長さ：>21 幅：>52 厚さ：17 [軒平部]瓦当幅：>47 瓦当高：40 瓦当厚：13 文様区画幅：>47 文様区画高：23	53	瓦当：均整唐草文 胎土：灰白色 二次焼成：なし 江戸式

第7節 ガラス製ボトル（写真6）

採集品にはガラス製品も含まれているが、8 点の 19 世紀のワインボトル底部が含まれていた。いずれも上げ底状になるもので、濃緑色か暗褐色の不透明な色調で肉厚の製品が多い。底部外面に「N」1 点、「S & LC」1 点の陽刻（鋳込み時のもの）が確認された。「N」については底部半欠なので続きの文字があるか不明だが、「S & LC」については S & L コーポレーションまたはカンパニーの略だろう。「S & LC」の刻印については同じものは情報不足のため、まだ確認できていないが、類似した刻印は東京都港区汐留遺跡、横浜市中区山下町居留地遺跡などの近代遺跡で発見されている。今回確認されたワインボトルはいずれも 19 世紀のヨーロッパ製と推定される。 (富永)

第8節 石製品（第20図、第11～13表、写真13～16・19・20）

1. はじめに

今回、私が担当したのはデビッド氏が採集された資料のうち、石製品にあたる資料である。このうち事前の整理・分類において選別した10点について、器種ごとに検討する。

2. 硯

1～4は、硯である。5と6も海（墨を溜めておくところ）の形状に多少の疑問はあるが、硯であると思われる。すべて石硯に属するが、海上がりであるため破損や磨耗が著しい。

硯は中国殷代（前約1500～前約1100年）に発生したと推測されているが、この時期の硯がどのような形態のものであったかは判然としない。硯の種類には、石硯の他に陶硯（土を窯で焼いて造った硯）、瓦硯（瓦を削って造った硯）、澄泥硯（泥を焼いて造った硯）、磚硯（煉瓦で造った硯）、銅硯、鉄硯などがあるが、石硯の出土が見られるのは秦代（前221～前206年）からである。唐代（618～907年）になると、歙州石や端溪石などの名石が各地で発見され、石硯が広く普及する。

日本に硯が渡来したのは古墳時代（二世紀～六世紀中葉）と考えられているが、はっきりしたことは分かっていない。大宝律令（701年）には、中務省の図書寮に造墨手四人を置いたとの記述があるため、この頃には硯も普及していたと考えられる。ただし、陶硯が一般的であったようである。奈良時代から南北朝時代ごろまで、東北地方の一大政治拠点であった多賀城址からは100点以上の硯が出土しているが、ほとんど陶硯である。石硯は何時頃から使われ始めたのかを調べると、平安時代初期に菅原道真が「菅家文草」で石硯を愛でる詩文を作っているため、この頃には使用されていたことが分かる。ただ、この頃の石硯は中国や朝鮮半島からの渡来品であったと思われる。日本産の石硯が普及するのは鎌倉時代に入ってからで、京都西山の鳴滝石や山口の赤間石などはこの頃採掘が始まったとされる。

以下では採集資料（1～6）について、まず石質と産地について検討し、次に形状と製作年代の観点から検討する。

石質と産地

1と2の石質は、粗粒凝灰岩である。硯に利用される石材は、粘板岩または頁岩が一般的で凝灰岩が利用されることは少ない。日本の著名な産地を見ても、玄昌石（宮城県）、虎斑石（滋賀県）、雨畑石（山梨県）、竜溪石（長野県）、鳳来寺石（愛知県）など石材は粘板岩や頁岩である。赤間石（山口県）や紫雲石（岩手県）など一部輝緑凝灰岩質のものもあるが、細粒緻密であり、泥（粒径1/16mm以下の碎屑物や粘土）の比率が高いことから、石質としては頁岩に分類される。

硯は墨を削るものだから砥石の一種でもある。それゆえ、砥石に凝灰岩が広く利用されている（中砥や仕上砥）ことを考えれば、硯の石材に凝灰岩が多く使用されてもおかしくない筈である。しかしながら硯の場合、砥石のように単に物を削ることが目的ではなく、墨汁を作り出すこと（発墨）が目的であるため、墨との相性が要求される。硬すぎると墨が滑ってしまうし、軟らかすぎると硯の方が削れてしまうからである。墨との相性を決める一因に鋒銚^{ほうぼう}がある。この鋒銚は硯の表面にあるヤスリ状の凹凸で、この有無や程度（並び方）が硯の良し悪しを決める。鋒銚が粗ければ墨はドロリとしてしまうし、細かすぎれば摺るのに時間がかかり出来上がった墨も水っぽくなってしまい、艶やかな黒色が出ない。鋒銚は硯石に含まれる鉱物などの組成物によって各石とも違うが、凝灰岩にはあまりなじまないようである。確かに江戸の遺跡からは、熊本県の天草産と推定される木目調

の凝灰岩製硯など、初めから凝灰岩を利用した硯や凝灰岩製砥石を加工した硯が出土することもあるが、凝灰岩の場合でも大概是細粒凝灰岩を使用したものである。1と2のような粗粒凝灰岩製の硯を見るのは始めてである。火山砂（礫）の粒径は異なるものの同一産地と思われるが、類例を知らない。資料を持って宮城県石巻市雄勝町の雄勝硯伝統産業会館や山梨県早川町雨畑の硯博物館（雨畑硯の里 硯匠庵）、長野県辰野町の竜溪石産地や滋賀県安曇川町の高嶋硯（虎斑石）産地などを訪ね硯職人や職員に見てもらったが、産地を特定することはできなかった。凝灰岩の産地は日本にも多くあるが、資料に近い色調と石質の産地となると、著名なところでは秋田県の十和田石、宮城県の松島石、福島県の白河石、栃木県の芦野石、福井県の^{しやくだに}笏谷石などが挙げられる。このうち最も資料1・2に近い石質と考えられるのは、栃木県那須町の芦野石であろうか。

3の石質は、粘板岩である。最も一般的に利用される石材であり、資料の中では最も硯としての石質が良い。先の宮城県石巻市雄勝町の伝統産業会館内にある雄勝硯生産販売協同組合事務局長の千葉隆志氏によれば、当該地の石材である雄勝石（玄昌石）に最も近い石質であるとのことであったが、断定はされなかった。雄勝町は現在、国内シェア80%近くを誇る硯の産地であるが、その起源は室町時代と言われ繁栄は元和年間（1615～23）に伊達政宗公へ当地産の硯を献上したことに始まる。以来、産地は江戸時代を通して仙台藩伊達家のお留山（一般の採掘を禁止した山）となっていた（写真19）。ただ、ここの石材は黒色粘板岩主体である。同じ山でも場所によって石質は異なるとしても、色調からして当該地の産出とは断定できない。もっとも、興津は江戸時代、江戸と東北を結ぶ東廻り航路の重要な中継港として繁栄した町であり、仙台藩の寄港地であったから、雄勝産の硯が持ち込まれた可能性はある。現に、興津港近くの妙覚寺には山門前と境内に仙台藩の船をつないだ石柱（繫船柱碑）が保存されているが（写真20）、この石柱は宮城県石巻市稲井町から運ばれた稲井石（仙台石）である。この稲井石も江戸時代、仙台藩により石山守が置かれ庇護されていた石で、砂質粘板岩に属する。

4は硯であることは間違いないが、いわゆる人造硯であると思われる。外面は黒色塗料で仕上げられているが、内部は石粉を固めたものと推測される。戦後、学童用に普及したもので、墨汁を用いる分には良いが、鋒鋭は無く墨との相性は悪い。著名な硯の産地でも生産され、雄勝でも1960～1970年代にかけて端材を使用した人造硯が盛んに生産された。

5と6の石質は、頁岩である。頁岩も一般的に硯に利用される石材であるが、既述のように海の形状に多少の疑問はある。ただ、全体的に見れば硯で間違いないであろう。2点とも凝灰質であり、色調はやや異なるが暗緑色系であるため、塩基性（珪酸分が少ない）の火山灰を多く含む産地のものと推測される。



19. 雄勝硯産地 仙台藩お留山



20. 妙覚寺 繫船柱碑

形状と製作年代

石硯の型式分類と編年については、水野和雄氏の「日本石硯考」¹を参考に資料を検討する。同論文によると型式については、平面形態から円硯、風字硯、楕円硯、台形硯、長方硯、その他の硯の六型式、更に内外面における特徴から13類に分類されている。また、側面形態（傾斜、垂直）および底部裏面形態（有脚、挟り脚、平坦）から合計78タイプに細分されている（第11表）。

資料（1～6）は遺存状態が悪く、完形品は無いものの残存部分から、すべて平面形態は長方硯Ⅰ類（外面長方形、内面長方形）と推測される。また、側面は垂直（1～

第 11 表 石硯の型式分類

型式	側面			傾斜(A 型)			垂直(B 型)		
	平面(外・内)	裏面		有脚	挟り脚	平坦	有脚	挟り脚	平坦
				(a式)	(b式)	(c式)	(a式)	(b式)	(c式)
円 硯	Ⅰ類	円形	円形	△ⅠAa		△ⅠAc			
風字硯	Ⅰ類	風字形	風字形	△ⅠAa	△ⅠAb			△ⅠBb	
	Ⅱ類	台形	台形		○ⅡAb	△ⅡAc			
	Ⅲ類	長方形	長方形				△ⅢBa		
楕円硯	Ⅰ類	楕円形	楕円形		○ⅠAb	○ⅠAc		△ⅠBb	△ⅠBc
	Ⅱ類	人角形	人角形		○ⅡAb	○ⅡAc			
台形硯	Ⅰ類	台形	台形	△ⅠAa	△ⅠAb	○ⅠAc			△ⅠBc
	Ⅱ類	台形	人角形		○ⅡAb	○ⅡAc			△ⅡBc
	Ⅲ類	台形	楕円形		△ⅢAb	△ⅢAc			△ⅢBc
長方硯	Ⅰ類	長方形	長方形		△ⅠAb	○ⅠAc	○ⅠBa	○ⅠBb	○ⅠBc
	Ⅱ類	長方形	人角形			△ⅡAc			△ⅡBc
	Ⅲ類	長方形	楕円形			○ⅢAc			△ⅢBc
その他の硯									

類例：多い(○)・少ない(△)水野和雄「日本石硯考」より

第 12 表 石硯の編年

年代	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀
型式								
△円 硯ⅠAc	鴻臚館(935) 朝倉							
△風字硯ⅠAa	大宰府31次							
△ⅠAb	南条坊							
○ⅡAb	・鞍馬寺(1120年)							
○楕円硯ⅠAc	・鞍馬寺							
○ⅡAb	狐塚古墳・新安(1323年)							
△台形硯ⅠAa	大宰府31次							
○ⅠAc	千葉地・新安							
○ⅡAb	大宰府31次							
○ⅡAc	・千葉地(1301年)							
△ⅢAb	・家久遺跡							
○長方硯ⅠAc	千葉地・朝倉43次							
○ⅠAc	・朝倉(1553年)							
○ⅠBa	江戸							
○ⅠBc	臨川寺(1509年)							
○ⅢAc	浪岡							
備考	・日本で硯材産出							

水野和雄「日本石硯考」より

からよく出土する裏面2/3程に長方形の浅い挟りを施した高嶋硯など、本来の石硯を指標としたものであるため人造硯には当てはまらない。4は戦後（1950年以降）の製品である。また、硯頭部が残存する5と6は18世紀以降の製品と思われる。17世紀以降、特に18世紀以後は硯頭部の縁帯幅が他辺の縁帯より広くなるという傾向があるからである。

3. 印判

7は、石製の印判である。上下二段に篆刻が施されているが、かなり擦れている。茨城県古河市にある篆刻美術館に持参し、館長の松村一徳氏に鑑定して頂いたところ、上段は白文（凹形に彫ったもの）で姓名、下段は朱文（凸形に彫ったもの）で雅号と思われ、上段右は「樋川」左は「山印」、下段は右から「雪陵」であろうとのことである。文字部分が擦れているため判読が難しく、上段の「川・山」や下段の「陵」については断定できないとも付け加えられた。印判の使用目的は不明だが、絵画などに押印したものであろうか。

印判の石質は、葉蠟石である。この石は化学成分が滑石と似かよっているため、外観もよく似て

いるが、滑石（硬度1）よりも硬い（硬度1.5）。滑石は、爪でも傷を付けられることから、印材には適さない。印材として有名な中国の「寿山石」（福建省産）、「青田石」（浙江省産）、「晶化石」（浙江省産）、「巴林石」（内蒙古産）なども葉蠟石に属する。日本にも多くの産地があり、現在でも長崎県の五島や広島県の勝光山・栃木県の今市などで採掘されている。江戸時代には岡山県備前市の三石鉱山で盛んに採掘され、彫刻工芸小物や印材などに使われた。なかには中国の寿山石と見間違ふほどの良材もあり、^{らいさんよう}頼山陽など江戸時代の著名な書画家の印に使われたこともあるが、全体として日本産は中国産に劣る。7は、石質はあまり良くないため国産と思われるが、産地を特定することはできなかった。篆刻美術館の松村館長も、中国産ではないでしょうとのことであった。

4. 火打石

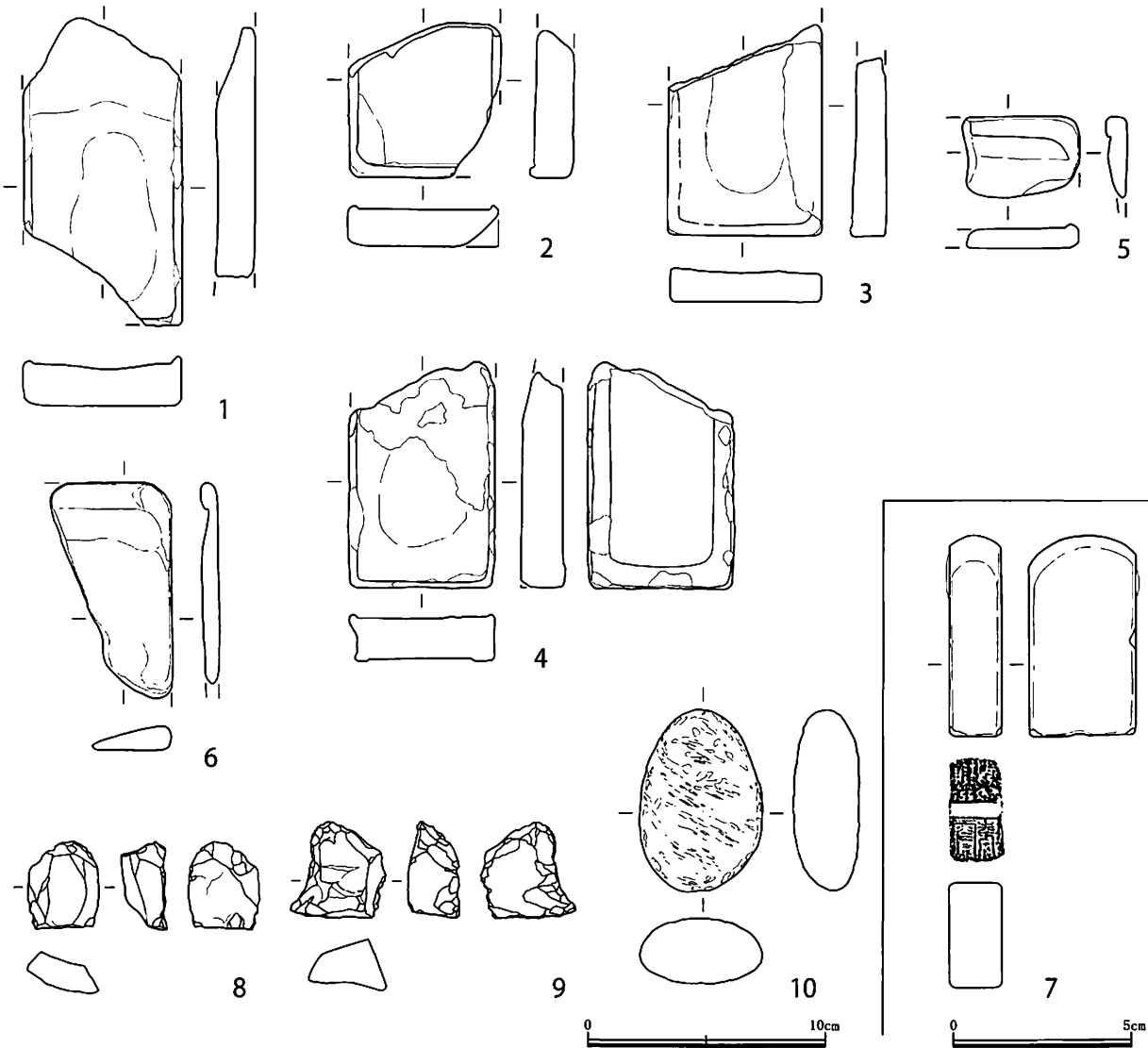
8と9は、火打石である。使用痕が顕著でないため、まだ原石の状態かもしれない。人為的に火を起こす方法には、木などを擦り合せてその摩擦熱をもとに発火する方式と石と金属を打撃してその火花をもとに発火する方式があるが、共に発生起源は定かではない。日本では摩擦式発火法は弥生時代、打撃式発火方は古墳時代から確認されているが、中世以降、特に江戸時代には打撃式発火法が主流を占めるようになる。硬度が7以上あれば火打石として利用が可能であるため、玉髄（瑪瑙）・チャート・碧玉など石英質系の石材の他、サヌカイトや黒曜石・ホルンフェルスなども各地において使用されていた。

8の石質は玉髄で、都内の江戸遺跡から多く出土する火打石の石材である。江戸時代、茨城県の山方地方で盛んに採掘され、「水戸石」ないし「水戸火打石」と称され当時としては最高級品であった。現在でも、久慈川の支流（北富田地方）で採取することができる。遺跡の報告書では、瑪瑙と表現されることもあるが、瑪瑙は玉髄の中で特に縞模様の有るものを指す表現であるから厳密ではない。

9の石質はチャートである。日本の中・古生層に広く分布する石で、世界的にも広く利用された火打石の石材である。日本でも関西圏で広く利用され、京都地方では鞍馬産、名古屋地域では養老産の青灰色チャートが知られている。9は非常に質が良いため、これらの産地のものとも考えられるが断定はできない。なお、フリントはチャートの一種であり、英語で火打石または発火石の意味があるため考古学や歴史学では火打石＝フリントという誤解が生じている。

5. 垢擦石

10は、垢擦^{かかと}用の石である。現在でも踵などの垢擦りに利用されているが、江戸の遺跡からも多く出土している。石質は、軽石である。この石は火山岩の一種で、流紋岩ないしデイサイト（石英安山岩）質のマグマが空中に噴出したため著しく多孔質になったもので、軽く水に浮くものもあるため浮岩（浮石）とも呼ばれる。日本は火山国であるから、各地に分布が見られるが、最も著名な産地は鹿児島県南部大隈半島の鹿屋市、垂水市付近に分布する薩摩産である。ここの軽石は、二万五千年程前に大噴火を起こし、陥没した始良カルデラに由来するものである。近くでは東京都の新島産もあるが、ここの軽石は角閃石や黒雲母の斑晶を含むという特徴を有するものの、資料10には見られない。外観からは薩摩産とも思われるが、色調が灰白色に近い（薩摩産はやや黒味を帯びた灰色）ことと、漂着資料であることを考えれば、1924（大正13）年に沖縄県八重山諸島の西表島北で噴火した海底火山に起因する軽石の可能性も考えられる。この時の軽石は黒潮に乗って北上し、銚子沖から宮城県沖まで漂流したとの記録が見られるからである。



第 20 図 石製品

第 13 表 石製品観察表

遺物No.	種別	石 質	法 量(mm)			重量 (g)	備 考
			長さ	幅	厚さ		
1	硯	粗粒凝灰岩	>129	67	21	197.3	頭部欠けるが、落潮(壘が海へ流れていく斜面)はほぼ残る。丘は僅かに窪む。右上から左下にかけて節理が走る。
2	硯	粗粒凝灰岩	>65	64	18	92.8	向口(天)欠如で、手前(地)1/3程が残存。左下のシミは後に鉄分が付着したもの。眼等の景色とは異なる。
3	硯	(輝緑凝灰岩質)粘板岩	>89	64	15	149.1	手前1/2程が残存。丘は僅かに窪んでいる。
4	硯	人造石	>95	60	19	160.4	手前1/2程が残存。落潮部分が僅かに残る。
5	硯	頁岩	>34	>49	10	24.6	頭部縁帯と海部分が僅かに残るのみ。暗緑色の地に黄褐色の脈が入っている。
6	硯	頁岩	>91	>51	10	49.4	5と同じように頭部縁帯と海部分が残っており、遺存状態は6の方が良い。淡緑色の地に暗緑色の斑模様が見られる。
7	印	葉蠟石	57	15	30	60.3	長方形だが、頭部は丸くなっている。頭部近くに細かい貝殻ないし珊瑚状の付着物がある。印面には朱が残っている。
8	火打石	玉髄	36	29	19	19.5	乳白色で、全面剥離されている。
9	火打石	チャート	41	40	22	34.9	背灰色で、全面剥離だが一面だけ風化の度合いが異なる。陵の一部に僅かながら使用痕が見られる。
10	垢擦	軽石(浮岩)	77	51	28	33.8	海ズレと思われるが全面磨耗している。

6. おわりに

担当した資料 10 点のうち 6 点は硯である。鑑定の依頼を受けたときは石質のみならず産地も同定して欲しいとのことであった。私もこの時点では資料を見るかぎり、かなり特徴的な硯が含まれているため（特に資料 1 と 2）、ある程度の産地同定は可能であると楽観していた。しかしながら、本文でも述べたように産地同定できた資料は 1 点もない。資料を持って著名な産地を訪ねたが、硯職人でさえそもそも硯に使用される石材ではないと不思議がっていた有様である（特に資料 1・2）。雄勝硯生産販売協同組合事務局長の千葉氏も、もし産地が分かったら教えて欲しいと逆に要請されるような状況であった。そこで硯について改めて資料を調べたところ、硯の産地は国内においても著名な産地の他にいくつもの産地があり、なかには採掘地さえ不明な産地が多数あることが判明した。国内でもこのような状況であるから、外国産（中国や朝鮮）の場合にはよほど著名な産地で、顕著な特徴がある硯（例えば端溪硯等）以外、産地同定はほとんど困難であろう。

石製品の石質については、ある程度の知識と経験があれば一応の同定は可能であるが、その産地同定は難しい。今回の鑑定を通して、石材の産地同定の難しさを痛感した次第である。黒曜石等一部の考古石材については、蛍光 X 線分析等の鑑定方法による産地同定の技術が進んでいるが、硯や砥石・火打石など近世考古石材の産地同定は研究途上であるのが現状と思われる。今後、この分野での研究の進展を祈念して結びとしたい。（伊藤）

【註】

- 1 日本考古学協会 1985 『考古学雑誌』第 70 巻第 4 号

【第 2・3・6 章 参考文献】

第 2 章 調査・報告の経緯と経過

デビッド・M・ギルフォイル 2005～2007 「波打ち際の宝石たち」『小さな蕾』創樹社
出川直樹 2005 「蒐集の心構え」『古陶磁－真贋鑑定と鑑賞－』講談社・P 267

第 3 章 散布地の地理的・歴史的環境

勝浦市史編さん委員会 2006 『勝浦市史 通史編』勝浦市
橋本勝雄ほか 1984 「先土器時代」『房総考古学ライブラリー』
宮重之 1984 「縄文時代（1）」『房総考古学ライブラリー 2』千葉県文化財センター
千葉県文化財センター 1989 「弥生時代（1）」『房総考古学ライブラリー 4』
江上波夫 1928 「上総興津町附近洞窟遺跡について」『浦和高等學校學藝部學友會雜誌』8
千葉大学文学部 考古学研究室 2002 『千葉県勝浦市こうもり穴洞穴第一次発掘調査概報』2002
千葉大学文学部 考古学研究室 2003 『千葉県勝浦市こうもり穴洞穴第二次発掘調査概報』2003
勝浦市教育委員会 1986 『千葉県勝浦市守谷長網横穴群の調査』
千葉大学文学部 考古学研究室 2000 『千葉県勝浦市本寿寺洞穴・長兵衛岩影第一次発掘調査概報』
千葉大学文学部 考古学研究室 2001 『千葉県勝浦市本寿寺洞穴・長兵衛岩影第二次発掘調査概報』
森輝 1977 『夷隅風土記』千葉県文化財保護協会
森輝 1964 「東海大廻しと奥津湊」『総南文化』第二号

第6章第1節 陶器

堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内における年代的考察」『東京大学構内遺跡研究年報Ⅰ』 東京大学埋蔵文化財調査室

根津美術館 2003 『知られざる唐津—二彩・単色釉・三島手—』

第6章第2節 磁器

有田町教育委員会 1994 『窯の谷窯跡』

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年』

佐賀県立九州陶磁文化館 1986 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』

喜多川守貞 1853 『守貞漫稿』

勝浦市史編さん委員会 2006 『勝浦市史 通史編』 勝浦市

群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『上福島中町遺跡』

千葉県文化財センター 2002 『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書9—東金市前畑遺跡・羽戸遺跡—』

東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本校構内の遺跡 医学部附属病院地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本校構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学本校構内の遺跡 工学部1号館地点』

東京大学埋蔵文化財調査室 2008 「東京大学本校構内の遺跡 農学部共同溝地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報6』

豊島区遺跡調査会 2003 『巣鴨町Ⅳ 東京都豊島区・巣鴨遺跡(藤和シティホームズ巣鴨地区)の発掘調査』

堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』

第6章第5節 瓦

金子智 1994 「尾張藩麴町邸跡出土瓦類の検討—軒平・軒棧瓦瓦当文様の変遷を中心として—」『東京都千代田区尾張藩麴町邸跡』 紀尾井町6-18 遺跡調査会

金子智 1996 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』101 早稲田大学考古学会

金子智 2007 「江戸の瓦」『考古学ジャーナル』No.553 ニューサイエンス社

山崎信二 2008 『近世瓦の研究』 同成社

第6章第8節 石製品

山本俊一郎・上野一彦 2008 「宮城県雄勝硯産地における生産構造と産地再生の課題」『大阪経大論集』第58巻第6号

木村鐵郎 1984 The 硯「石は語る」 日貿出版社

加藤祐三 2009 『軽石—海底火山からのメッセージ』 八坂書房

人文社 1997 「郷土資料辞典 12 千葉県 ふるさとの文化遺産」

千葉県高等学校教育研究会歴史部会 2006 『千葉県の歴史散歩』

第7章 調査のまとめ

各時代ごとの報告や、それぞれの遺物についての所見は各項目の執筆者に譲り、本章では調査会会員の総意による先史時代から江戸時代までを通しての興津港と蒐集遺物について若干のまとめを述べることにしたい。



先史時代の遺物としては縄文土器が10点あった。当初弥生土器も含まれているものと推測されたが、結果的に古墳時代後期以降の土師器であった。蒐集された土器は摩滅が著しく、原体（文様）の観察が非常に困難であった。そのため、実測、拓影採取された資料は、縄文時代前期の井草式、中期の勝坂式など多様であった。勝浦市内の遺跡地図には¹、浜の北西、妙覚寺の南西に興津中学校前遺跡がある²。縄文土器が出土しているようだが、遺跡の中央部が削平され消滅したようである。

古代の資料には土師器と須恵器があった。これらの遺物も摩滅が著しいが、古代の遺跡としては浜の南西、辨天岬の先端に弁天崎洞窟がある³。この洞窟からは弥生土器、奈良・平安時代の土師器、人骨、魚骨、貝などが出土しているようである。第5図の4～10に掲げた遺物は、古墳時代から奈良時代の遺物であるが、当該洞窟が横穴墓であれば、ここからの遺物の流出が考えられる。

中世の遺物は111点であった。所属時期は13世紀から16世紀に及んでいる。海浜に最も近い遺跡としては興津字湊2467-1に所在する二十三夜様やぐらがあるが、詳細は不明である⁴。また当該時期の遺跡としては港から400m程の丘陵上に興津城が位置している。この城は12世紀から16世紀の豊臣秀吉が関東を手中に納めるまで正木氏が居住したと伝えられている。三つの郭からなり遺構としては土塁や空堀が認められている。興津港からはやや遠く関わりなどについては不明であるが、採取された遺物の量や質から見て海浜部周辺に遺跡が存在したことを示唆しており、中世興津の歴史を考える上で貴重なものである。

ところで、資料の蒐集者であるギルフォイル氏は「黄瀬戸」「織部」「志野」「備前」「古唐津」など中世後期の茶陶に注目していた。茶陶は数が少なく当時も高価で希少であった。しかし今回整理した資料はいずれも所謂桃山期の本格的な茶陶とは異なり、多くは17世紀初頭以降の江戸遺跡から出土するごく一般的な器種であったため、今回の報告では特別取り上げることはしなかった。但し、近世初頭において上総勝浦の領主であった植村泰忠による発給文書のなかに勝浦における「市」を許可し、酒をはじめとする諸物資が売買された盛況ぶりが記録されている⁵。これに対して興津港が単なる漁村、避難港と考えられがちであるが、このような近世初頭の陶磁器類の出土は、当時の興津港の活況ぶりを示唆するものであろう。当然そこには仙台藩などの北回り廻船の積荷や、売買のため荷揚げされた商品の一部であった可能性がある。同様の陶磁器類は仙台青葉城からも数多く出土している⁶。

近世以降の陶磁器については堀内の報告に詳しいので参照されたいが、肥前陶磁は17世紀末から18世紀前半に大きなピークが見られた。浜で採取された磁器類の遺存状態は極めて良好な個体資料が多い。これを元禄16年（1704）の大地震の津波による生活材の流出



江戸に送るための魚を入れた生簀

と見るか、難破船の積荷の一部が混じっているのか、判断は難しい。『小さな蕾』誌上においてギルフォイル氏が予察した難破船の座礁を決定付ける材料に乏しいが、遺物の量や質から見て我々は「興津海浜遺跡」と命名しようと考えた。

興津港と同様な陶磁片が採取出来る浜は、メンバーによる過去2度の周辺における踏査で確認できた。房総半島の先端を目指し主たる海浜を見て回った際に、興津の南に位置する江見漁港周辺にも近世陶磁器が多く散在している浜が認められた。本吉正宏氏は濱行川村における津波の想定到達域を示している⁷。興津港の津波による被害状況は行川地区ほどの資料はないが、昭和35年(1960)のチリ地震の際に、興津地区では市街を貫通する国道128号線旧道付近まで津波が上がったという証言もあるという。

これらの印象から興津浜を含めた房総半島東岸の沖合には江戸時代の船舶が座礁している可能性は極めて高いと推測されるのである。しかし太平洋沿岸は温暖な気候のために船虫による船体の食害は免れないだろう。また潮流も想像以上に速いため、伊豆神津島で座礁し沈んだ船のように船体の確認は難しいかもしれない⁸。



本書作成中の、昨年3月に先島文化研究所から『名蔵シタダル海底遺跡共同調査報告書』が刊行された⁹。中国の窯業史を研究されている関口廣次氏を中心とするメンバーにより、大瀨永宣氏が50年にわたって蒐集された明時代の海底遺跡出土の青磁、白磁3,000点を詳細に分析されている。今回我々の行った調査もこれとよく似ているが、本遺跡の遺物の所属時期は多岐にわたっており、手掛りとなるべく資料が殆どなく、具体的にどのように使用され、廃棄されたのか、それら人的活動の痕跡は全く不明であった。しかしこの資料群に対して様々な可能性について幾つかの問題提議ができたのではないかと考えている。それぞれの職務の間を縫って行った作業であったため、十分な分析とは言えないが大方の御批判・御叱正を賜りたい。

末筆となりましたが、例言に掲げた以外にも多くの方々に御協力を賜りました。深謝いたします。

(会員一同)

【註】

¹ 勝浦市教育委員会 1989 『千葉県勝浦市埋蔵文化財分布地図』

² 本吉正宏 2006 「第1章第2節縄文時代」『勝浦市史一通史編一』 勝浦市史編さん室

³ 本吉正宏 1995 「勝浦市における海岸遺跡の様相」『勝浦市史研究』創刊号 勝浦市教育委員会による。

⁴ 前掲書註3に同じく。

⁵ 滝川恒昭 1997 「中・近世移行期における上総勝浦湊の実像―市の考察を中心として―」『勝浦市史研究』第3号 勝浦市教育委員会

⁶ 仙台市史編さん委員会 2004 「特論3 陶磁器の流通と消費」『仙台市史』(通史編5. 近世3)

⁷ 本吉正宏 2006 「勝浦市行川地区における元禄津波被害」『勝浦市史研究』第9号 勝浦市教育委員会

⁸ 東京都教育委員会 1993 『神津島沖海底遺跡』―東京都埋蔵文化財調査報告第20集―

⁹ 先島文化研究所 2009 『名蔵シタダル海底遺跡共同調査報告書』

「時空集積」への挑戦

中国杭州の西湖を訪れた時、湖畔の砂地や草むらの中に点々と古陶磁片が散らばっているのに気付いた。周囲の絶景をそっちのけで同行8人ほどで夢中になって拾い集めてみると、そのバラエティに驚いた。宋の建窯や河南の天目、耀州や越州の青磁、龍泉窯は南宋・元・明・清と揃い、その他明・清の景德鎮染付、清の広東染付・時代不明の磁州鉄絵・白釉陶などなど。往古より文人墨客が数多く遊んだ名勝である。岸辺の宴で割れたり船の遊覧で取り落とすことも多かったのだろう。ところが七年後に再訪した時にはなぜか岸辺に陶片はほとんどなかった。

鎌倉の海岸でも砧青磁の陶片が打ち寄せられると聞き採集を試みたが見つからず、替りに百数十点の中に常滑・備前と思われるもの、江戸中期・幕末の瀬戸や伊万里、伊万里や美濃らしき明治の銅版手などの古陶磁片が意外にも現代陶磁とほぼ同じ位あった。

シルクロードに点在する小さな街々、あるいは隠岐・八丈のような絶海の孤島また今回の興津浜資料などは特殊な性格を持っている。これらは通常のある時代またある地域に限る遺構（遺物）と異なり、時間軸としては時に何千年を超す各時点から、また空間軸として時に何千キロを超える広範囲の各地点から遺物が集まってきているという点である。その地域の各時代の遺構・遺物が重なっているのを「時間集積」、その時点の広汎な地域の遺物が集まっているのを「空間集積」とすれば、こうした時間・空間ともに広がり大きなこの類は「時空集積」の場と把握されるべきだろう。その時代や地域に密着し特化した情報に加えて、より広汎な鳥瞰的な知見が発信されているのだ。このような遺物を持つ地域は少ないが、興津はまさにその希少な「時空集積」の宝庫を持つ土地である。

この宝庫の鍵を開けたのがデビッド・M・ギルフォイル氏であった。

彼は有能なビジネスマンとして実業界に身を置く多忙な生活の中で、以前は版画・民芸品、そして二十年程前から本格的に古陶磁に関心を移し、中世古窯・古唐津・李朝陶磁などの熱心なコレクターとなった。数年にして美的感覚と鑑定力を高められたが、その進歩の早さは瞠目すべきものであった。

彼の興津浜採取資料については早くから注目し、共に現地の浜辺を歩いてみたが、ひと波ごとに違う陶片が届けられ砂の上に置かれているといった感じが実に楽しい。資料をまとめる第一歩として雑誌への連載を奨め、これは「波打際の宝石たち」と題して15回続き、いよいよ今回本格的な調査報告書の形となって結実したのである。

「時空集積」型の遺跡や遺物群に対してはおのずから通常の遺跡・遺物群とは違うスケールのアプローチが要求される。一時代、一地域についての専門的知識ばかりではなく、より長い時間軸とより広い空間軸への識見とそれらを有機的に結びつける分析力が必要となってくる。その意味からも今回この難題に果敢にあたり調査書をまとめたチームに敬意を表したい。

この度のこの研究成果は興津という港町の歴史の深さと広がりをも物証的に明らかにしてくれると同時に、「時空集積」の場へのアプローチの在り方を探る好例となろう。

出川直樹

**INVESTIGATIVE REPORT ON ARCHAEOLOGICAL SITES
AT OKITSU-SEASHORE, KATSUURA CITY, CHIBA PREFECTURE
AN ANALYSIS AND A READJUSTMENT OF DAVID M.GUILFOILE'S COLLECTION**

BY

DAVID M. GUILFOILE
KOREMURA TADASHI
UCHIKAWA TAKASHI
SUGANE YUKIHIRO
KOIKE SATOSHI
TOMINAGA SHIGEYUKI
HORIUCHI HIDEKI
KOMIYAMA TOMOYASU
HARA MICHIRU
TSUCHIMOTO ASAKO
ITO TOSHIHARU
IDEKAWA NAOKI

**OKITSU-KAIHIN-ISEKI-CHOSA-KAI
[RESEARCH INSTITUTE FOR ARCHAEOLOGICAL SITES OF OKITSU SEASHORE]**

**TOKYO
2 0 1 0**

CONTENTS

Abstract
Acknowledgement
Explanatory Notes
Legends
Contents

Pictorial Date

The distant view of Katsuuraokitsu-Seashore: the spot of pottery fragments dotted

Katsuuraokitsu-Seashore

Investigation scenes (Guilfoile shown at right in the photo; Taken in 2005)

Dispersion pattern of excavated pottery fragments (taken in 2008)

1. Jomon Ware (Jomon Pottery)
2. Haji Wares and Sue Wares (left: surface/ right: backside)
3. Chinese porcelain
4. European porcelain
5. Mid-Age pottery
6. Glass products
7. Karatsu-Oribe
8. Nisai-Karatsu
9. Karatsu
10. Bizen
11. Kawara
12. Clay products
13. Grinding stone
14. Stone seal
15. Flint stone
16. Pumice stone
17. Written materials

Report of Investigation

Chapter 1. Beginnings: background of research

Chapter 2. Process and Direction of Research

Chapter 3. Geographical and Historical environment of the spot of pottery fragments dotted

3-1. Geographical environment

3-2. Historical environment

Chapter 4. Relics of the prehistoric period

4-1. Clay Wares

Chapter 5. Relics of Ancient Period and Mid-Age

5-1. From Kofun to Heian Period

5-2. Mid-Age

Chapter 6. Early Modern / Modern Period

6-1. Pottery

6-2. Porcelain

6-3. Ceramic ware for trade

6-4. Clay product

6-5. Earthenware hibachi brazier

6-6. Kawara

6-7. Glass bottle

6-8. Articles of stone

Chapter 7. Summary and Conclusion, Contribution

SUMMARY

In this study we explore and redefine David M. Guilfoile's collection of relics collected during from the early 1980's to 2005 around Okitsu-seashore, Katsuura-city, Chiba prefecture. The relics collected at Okitsu-Seashore belong to various historical periods.

We illustrate the various aspects of materials on Okitsu archeological sites and relics in successive historical period, from Prehistoric Era to Edo Era.

<Prehistoric Period>

- 10 Jomon Wares-Igusa and Katsusaka formula.
- Remains in front of the Okitsu Junior high school [Okitsu-Koko-Mae-site] at the Northwest of Okitsu seashore.

<Ancient Period>

- Attrite Haji Ware and Sue Ware
- Bentensaki Cave at the Southwest of seashore, the edge of Benten Cape

From this Cave, Yayoi Ware, Haji Ware in Nara and Heian Period, human bones, fish bones and shells are excavated. If this cave shall be deemed as ancient tombs dug into the side of a hill, it can be assumed that some relics were run off from this cave.

<Mid-Age>

- 111 relics are found as a Mid-Age(medieval) objects. They are regarded as the relics produced during from 13th to 16th century.
- "23 ya sama Yagura", Scaffold for moon viewing party is the nearest archeological remain from Okitsu-Seashore at this time.
- Okitsu-Castle at the hilltop area, 400m away from the Seashore.

This castle is comparted to 3 partions. As remains of the foundations of this castle, agger and dry moat are observed. The relation between this distant castle and Okitsu-Seashore is not clear. The quantities and qualities of picked remains at the castle suggest that there existed much more archeological sites around Okitsu seashore. Therefore Okitsu-Castle occupies a precious position in the study of Mid-Age history of Okitsu area.

<The end of Mid-Age to Modern>

- Chatou produced at the beginning of 17th century in the Edo Period.

Yasutada Uemura, the domain head of Kazusakatsuura at the beginning of early modern era, granted great deal of independence to Katsuura area as "Shi" and a right to merchandise some stuffs like alcohol. In contrast, Okitsu-Seashore often deemed as mere fishing village. However, the excavation of those potteries suggests that Okitsu was flourishing seaport and had a thriving port. Of course we can not deny the possibility that these objects include the cargo of Sendai-han's northbound commercial ship and discharged merchandise. The potteries of the same sort are also excavated from Sendaiwakaba-castle.

<Early Modern / Modern>

Hizen Pottery produced during the period between the end of 17th century and beginning of 18th century. Well-preserved as materials.

Okitsu-Seashore often deemed as mere fishing village. However as a result of our research, it can be clarified that Okitsu was historically flourishing seaport. The qualities and quantities of the materials excavated from Okitsu castle can be taken as evidence that there are much more archeological sites of Mid Age around Okitsu-Seashore. Furthermore, the amount of ceramics and wares for trade such as Hizen deemed as Early Modern / Modern Periods' relics suggests that Okitsu was flourishing seaport at that time. Though it is unclear whether those relics such as ceramics are commodities run off by the natural phenomena or cargo of commercial ships. It is possible that those excavated objects in post modern period include the cargo of Sendai-han's northbound commercial ship and discharged merchandise. The potteries of the same sort are also excavated from Sendaiwakaba-castle. We have denominated the remains at Okitsu-Seashore as "Okitsu-Seashore Archeological Sites". We couldn't find a useful clue to specify how the relics were used and discarded for human activities. The excavation of those potteries suggests that Okitsu was flourishing seaport and had a thriving port. Despite this, we managed to draw a detailed portrait of the materials and raise a significant point of view to existing ideas. There is insufficient empirical evidence at this time to support Mr. Guilfoile's hypothesis that some of these relics are from shipwrecks inside or at the entrance to the Okitsu seaport. However, we do not discount this possibility given the historical record of shipwrecks along the Katsuura coast.

千葉県勝浦市

興津海浜遺跡調査報告書

ーデビッド・M・ギルフォイル氏蒐集資料ー

編 集 興津海浜遺跡調査会

発 行 有限会社わらしべ

発行日 平成 22 年 10 月 10 日

印 刷 有限会社平電子印刷所

